

---

# キミと僕が全裸になる確率-18% (ライトなロボラブコメ)

やった

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミと僕が全裸になる確率 - 18% (ライトなロボラブコメ)

### 【Nコード】

N8928Z

### 【作者名】

やった

### 【あらすじ】

なんか全裸になったりするロボもの

その日、エメラルドグリーンの髪をなびかせる少女に、一つの運命が宣告される。

「スピカ・メイルシュトロ・ニルヴェイナ　貴公の>定め<sup>ラ</sup>へヴァ  
 ≪<sup>リエ</sup>人<sup>ク</sup>をここに告げよう」

「はい、神父様」

スピカと呼ばれた少女は、片膝をついて初老の男に深々とお辞儀をしてみせた。数百立方キロメートルに及ぶ、無機質で広大な空間。その空間を埋めるようにして無数に浮かぶ純白の円柱。彼女たちは現在、中でも特に広い面積を持った柱の上で対峙していた。

千人以上が軽く乗れそうなその広大な足場は、何の装飾も施されていない。彼女たち二人が乗っている以外、何も無い。ここはそういう場所　運命の場所だった。

神父と呼ばれたその初老の男は、半透明の本を掌の上でくるくると浮かばせ躍らせながら、眉一つ動かさずにスピカを見つめ続ける。人工的な風が、意図的な生暖かさを以て不意に彼女の頬を撫で上げた。つまるところ、ここは全てが作られた世界だった。大気どころか、空までが人工物だった。擬似的な空を映す遮光ドームに包まれたこの星では、天を仰いだところで本物の恒星を拝むことは出来ない。

ただ、その代わり。

「貴公は　？地球星日本国民？、タツル・コモリヤマと、将来、結ばれるであろう」

「？運命？を演算するほどの絶対的な科学力を、この星は有していた。

「……………地球、ですって……………」

それは彼女にとって初めて耳にする、聞きなれない単語だった。即座に量子ネットワークに意識を接続し、頭の中で検索をかける。

地球。 > 完成体<sup>エリミナ</sup> < 進化係数、『マイナス18』。無限に広がる宇宙の中で、数えるほどしか例のない最大マイナス係数を持つ星存在してはいけない星と呼ばれ、そのことから皮肉を込めて、『無限分の一の惑星』とも揶揄される。

その有り得ない結果に、スピカは思わずもう片方の膝をも折ってしまう。

「ど、どういうことですか！？ 進化係数がマイナスって、> 完成<sup>エリ</sup>体<sup>ミナ</sup> < にとっては死の惑星ではないですか……！！ それに、18！？ 万に一つも存在し得ない最大係数ですよ！ そのツル・コモリヤマという男は、> 完成体<sup>エリミナ</sup> < のクセにそんな場所に住んでいるのですか!？」

「そんな甘い話ではない。私もこんなことは初めてなのだが 相手は> 原初体<sup>ファルム</sup> < だ」

「> 原初体<sup>ファルム</sup> <、ですって……？ そんな……まさか……ならその男は、進化係数マイナス18の惑星で、> 完成体<sup>エリミナ</sup> < への進化を果たすとしてもいのですか!？」

「有り得ん。進化係数は絶対だ。むしろその逆 その星に赴けば、我ら> 完成体<sup>エリミナ</sup> < は死の星の干渉を受けて退化してしまうだろう。マイナスとはそういう意味だ」

「退化、ですか………面白い。あたし、今から確かめにいってきます」

「ならん。予言といえども、退化する可能性が高い星に姫君を向かわせるわけにはいかぬ。我らは貴重な貴公の力を失うわけにはいかんだ。勝手は許されぬぞ」

神父はくるくると浮かんでいた本を突然に消失させ、少女をぎろりと睨む。

「……大丈夫ですよ。ベルを連れていきますから。ベルのコアの特性はご存知ですよね？ あいつを連れていけば、あたしは退化しま

せん」

「む……しかし危険すぎる。ベルゼゴレの力にも限界があるう。それに かの『無限分の一の惑星』に姫を向かわせるなど、陛下が何とおっしゃられるか」

「神父様、残念ですが、あたしは有言実行がモットーです」

スピカは踵を返し、ふわりと浮かび上がる。その真紅の瞳には強い決意。

彼女の行く先は、既に決まっていた。

「タツル・コモリヤマに、接触します」

\*

子守山こもりやまタツルは今日という一日を忘れない。

タツルがこの世に生を受けて十六年、イチモツの大きさくらいしか他人に誇れるものがないと思っていた彼に、もう一つ誇れるものが生まれた瞬間だった。

そう、それは友人。生誕を祝ってくれる暖かい友人たちを、彼は誇りたいと思えた。

こんなにも素晴らしい十二月十一日は初めてだった。

友人たちに囲まれ、妹がキャッキヤと騒ぐ中、ふう、とロウソクの火を一息で消す。

拍手喝采に包まれ、自然と頬が緩んでしまった。

「みんな ありがとう！」

タツルの母親が肺がんで亡くなってから既に五年。最初は自分の誕生日なんて祝う気にもなれなかったタツルだが、今は違う。こうして祝ってくれる友人たちがいる。一緒に過ごしてくれる仲間がいる。

だからもう、泣く必要はない。涙は卒業したのだ。卒業したというのに。

「ありがとう……う、うえええ……」

涙が溢れて、止まらないのだった。

( いい高校入ったなあ……俺…… )

タツルは涙を拭い、誕生日用にデコレートされたケーキを一気に頬張った。

美味。信じられないくらいに、甘くて 美味しい。

「にー、きたいないです、めーっ、ですっ!」

小学六年生であるタツルの妹、子守山陽菜こもりやまはるなが、ティッシュを掴まんでタツルの口元を拭ってくる。外ハネのショートカットヘアを揺らす純粹無垢でしっかりものの妹は、すぐにタツルの世話を焼きたがった。

「おいおい、甘やかしてんじゃねーぞ、陽菜。このシスコンすぐ調子乗るからよ」

ふん、と鼻を鳴らすのは神宮司美里じんぐうじみさとである。金に染まった髪は癖っ毛のないストレート。凜とした目尻から清廉な印象が強い彼女だが、残念ながら言葉づかいが雑だった。

美里はタツルのクラスメイトで、パーティの主催者だ。「お前来て誕生日だろ? パーティでもやるうぜ」などという男前な一言で、今日のこの会が設定されたのだ。

「そんなことより、陽菜ちゃんって、くまさんおパンツ?」

やたらと襟足が長いメガネ男子の里中健さとなかたける(通称サタケ)が、突然全く関係ないことを真顔で言っただけ。間髪入れずに、美里が近くにあったスリッパで後頭部をすっぱ抜いた。

「おい、てめえ、陽菜引いてんだろ。ああ? 陽菜は下ネタが嫌いだったってんだろ」

美里は涙目の陽菜を抱きよせ、頭を優しく撫でながらサタケを睨みつける。

陽菜は美里の妹と親友で、しょっちゅう美里家に遊びにいらっている。そのため、陽菜は美里とも仲がいい。陽菜にとって美里は頼れるお姉さんなのだった。

妹の陽菜、金髪ヤンキー風少女の美里、変態メガネのサタケ。

それにタツルを加えた四人が、今日のパーティーの参加者だった。  
「でも本当に、ありがとう！」

タツルはぐずぐず言いながら、感謝の意を述べる。

素晴らしい友人たちに囲まれ　素直に、幸せであると感じた。

\*

「あれ……？　でも、なんか……足りない、ような……」

パーティー終了後に友人たちを見送った後、タツルは一人、リビングにて考えに耽る。

美味しい料理を（自分で作って）食べた。美味しいケーキを（自分で作って）食べた。

（自分で買ってきた）クラッカーで盛大に誕生日を祝い、（自分で飾り付けた）パーティー装飾を眺めて楽しんだ。（自分で用意した）シャンパンも、素晴らしい咽越しだった。

それでも、足りないものがある。そう、それは。

「た、誕生日プレゼント……何も貰ってねえ……」

タツルはするすると二人掛けのソファからずり落ちる。冷静に考えてみると、何から何までタツルがすべての作業を一人でやっていたのだ。主催者の美里は「パーティーでもやるうぜ。じゃあ、タツル、準備よろ！」の一言でタツルに丸投げ、後は完全にノータッチだった。

そしてさらに冷静に考えてみると、サタケに至っては、ただでケーキが食えるというだけでタツル家にやってきたフシがあった。

結局彼らは誰一人として、タツルにプレゼントを渡してなんかいない。

それはつまり、タツルが一人で浮かれていただけ　ということだった。

「なんだよ……俺、口ボ的な何か欲しいって言ったのに……ちく

しょう！」

タツルはリビングのテレビの上に並べられたロボットフィギュアを眺めながら、脱力気味に不平と不満を漏らした。欲しいものアピールは全くの無駄であったことに気付く。

徐々に負の感情に苛まれていく。込み上げる怒りのやり場に困って、タツルはとりあえずソファアの上で涙目のままブリッジをしてみるのがだった。

「ちくしょオオオッ！」

「にー、お風呂あがったですよ……って、にー！？」

風呂上がりで瑞々しい陽菜は、恐怖の大王にでも遭遇したかのようには怯える。タツルはすぐに起き上がり、「はーるなっ」などと爽やかに声をかけてみたが、しかし陽菜は瞳に涙を浮かべたまま無言で走り去ってしまった。彼女は変態的なものが非常に苦手なのだ。

「ああ、妹の陽菜からすらプレゼントを貰えない俺って……仕方ない、陽菜の残り湯にでも浸かってそれを自分へのご褒美としよう……」

人として兄として、かなり危ない発言をしながら、タツルはフラフラと脱衣所に向かう。刹那にして真つ裸となり、身体に湯をかけることもなくいきなり浴槽に飛び込んだ。

「ああ……癒されるなあ……」

フンフーン、と適当な歌詞を口ずさみながら、タツルは疲れを癒す。こんなにも気持ちいいのだから、今日の出来事なんてすべて水に

「……あいつら絶対許さねえ……」

まあ、流せないのだった。

「結局、友人なんて誇れるようなもんじゃないな……俺にはやっぱり、これしか……」

自らの巨大な息子を眺めながら、タツルは悲観した。他人に誇れるのはイチモツのサイズだけ、なんて、妹には死んでも言えそうになかった。



「……………？ なんだ？」

そのときだった。

パチン、パチン、と、何か小さく弾ける音がする。微小な炸裂音は、時を重ねるごとにそのペースを上げていく。やがて、パチパチ、いや、バチバチと。

最終的に「バチチチチッ！」と無視できないレベルに至ったところで、

「のわあああっ!？」

などと、タツルが叫び声をあげたところで、

「……………え？」

？それ？が、突然現れたのだった。

一瞬の沈黙。

「えっ、ロボ……………？」

タツルは瞬きを繰り返す。自らと同じ浴槽に浸かる？それ？は、何度目を凝らしてみたところで、二足歩行の人型ロボットにしか見えなかったのだった。

真紅の装甲は金属的な材質のようであり、タツルが浴槽内で伸ばした足の先がその硬さを感じ取っていた。

全体的に流曲線をモチーフにしてデザインされたであろうそのフォームは女性的な印象があり、一切傷のない真新しい外装と相まって美しかった。

人でいうところの目、鼻、口がある部分はT字型の空洞となつて繋がっており、その奥からはエメラルドグリーンの輝きが深淵より浮かび上がる。

……………1/16。そう、これは1/16サイズのプラモデルか何かに違いない。

何のアニメのロボットなのかはタツルには全く分からなかったが、逆に一つだけ、分かってしまったことがあった。

「これは……………俺への……………誕生日プレゼントオオオオッ!？」

つまり これはドッキリだったのだ。

誕生日プレゼントがないと悲しむタツルの前に、いきなり現れた1/16サイズのロボット。これは買えばきつと十万円くらいはするだろう。そんなにも高価なものを、タツルを驚かせたやりたい一心で、きつと美里やサタケが互いにカンパしあって買ってくれたのだ。

我が人生に一片の悔いなし。

タツルはその場で大粒の涙を流し、隠しカメラか何かでこの様子を眺めているであろう友人たちに向けて、精一杯のありがとうを叫び 両手で、そのロボの肩を掴んだ。

次の瞬間。

スッパアアアン、と。

ロボットが纏っていた真紅の装甲が、弾け飛び、霧散し、消滅した。

再度、静寂が訪れる。

「……………え」

「……………？ えっ」

代わりにその中から現れた？彼女？と、目が合った。

「ちょ、待つ……………えっ」

「……………な、な……………」

水に濡れたエメラルドグリーン髪の毛を揺らす？彼女？は、比類ないほどに美しい。真紅の瞳が清らかに輝く、一糸纏わぬ華奢な姿。まるでどこかのお姫様のようなであった。

それが、何故、全裸で浴槽に？

驚きにつき、謎の恐怖に襲われた。

「待ってください不可抗力なんですうううう！！」

「な、なんですってええええええええ！！？」

いきなりの絶叫で思わず仰け反る。ヤバイ 反射的にタツルは言い訳を開始する。

「ち、違うんです、マジで不可抗力なんです、まさかロボの中に人がいるなんて……………！！」

「な、な、なんで、あたしの > 完全装鋼 < が破られんのよ!?」

完全に会話が噛み合っていない。タツルは「少女の裸を見た」逮捕」という短絡的な妄想を繰り広げ、パニックに陥っていた。しかし混乱していたのは少女も同様だった。

「……………え。そもそもあたし……………いやあっ！ ちよ、ちよっとお……………嘘でしょ……………？ あ、あたし、は、裸見られちゃったよう……………お、男の人に……………見られたこと、ないのに……………え……………っていうか……………あ、あんだ、の、それって、もしかしてチン……………ふえ……………」

突然強気を欠いて、瞳に涙を浮かべながら恥じらう少女。その肌は雪のように穢れのない透き通った白色。本来凜としていて二重の目はその勢いを失い、彼女は無力にも唇をぎゅっと結ぶのみだった。その姿は儂くもいじらしく、タツルの心臓の鼓動を速めない。いや、えっと、その、っーか見てないです！ うん、全然見えない、綺麗なピンク色だったし、全然大丈夫！ それに俺のも、ほら、綺麗だすかるん！」

一方、濡れた黒髪を掻きわけながら声を荒げるタツルは、支離滅裂の上に言葉尻を噛んでいた。キリツとしたつもりでも完全にエロ顔であり、ただでさえ「生気がない」と揶揄される顔つきに変態という最悪さをプラスしていた。

そのせいだろうか。ぐずぐずしていた少女は一気に本泣きに変わり、

「ふええええええええええ！」

大声で、全力で、近所迷惑という言葉に真っ向から喧嘩を売りにいった。

「な、泣くなっつて、ごめん、ごめんよ！ 謝るから！ あと、お礼言うからさあ！！」

タツルは少女の両腕を掴み、押し倒すかのような勢いで、なんとか近所迷惑少女を止めようと試みる。 が、それがまずかった。

「にー、いったいどうしましたかー？ なにがあっ……………たのです……………か」

ツルは、ガタンと勢いよく開け放たれた風呂場のドアの方向に振り返る。

そうして絶句した。一番見られてはいけない相手に

「にー……………いったい……………なにを……………」

見られてしまったわけ。

「しているですかあああーっ！」

「まだ何もおおおおーっ！」

軽快な破砕音は窓が思いつきり割れた音。

風呂場の窓を突き破り、ご近所の天空を全裸で飛翔する中で、ツルは走馬灯をみた。

（ああ……………陽菜は町内腕相撲大会？大人の部？で、優勝をかつさらったからなあ……………）

自慢の妹の自慢の腕つぶしは、死んだ母親のそれにそっくりだった。

「あべるんツ！？」

五十メートル先の道路に顔面を叩きつけられ、アスファルトの味を噛みしめながら、全裸の変態は思った。

ってというか俺、今日誕生日だよな？

・  
・  
・

1

「　　ということがあったんだよ。そのあと、俺のイチモツの巨大さに恐れを為したパンピーどもが案の定ポリスメンに通報しやがって、何故かそのまま猥褻物陳列罪で捕まってね。まあ、『あれはイチモツではなく、ツチノコだった』という主義主張を貫いた結果、朝までにはなんとかなったんだが……………」

翌日、橘朝日たちばなあさひ高校への通学中に駅ではったり美里と出くわしたツルは、駅から学校へ向かうバスに乗り込みながら、昨夜の武勇伝を得意気に語っていた。

「な、なあ……タツル。病院に行った方がいいんじゃないか？ ガラスが頭頂部に突き刺さったか何かで、頭がおかしくなってるぞ、多分」

金色の髪をポニーテール状に結った美里は、タツルの話をまるで信じていないようだった。彼女は純粹に、タツルがアホになったのだと認識していて、心配しているのだ。

（だよなあ……風呂に入ったらロボがいて、手で触ったら美少女に変身した　なんて話、どう考えても嘘っぽいもんなあ……）

タツルはがっくりと肩を落とす。そもそも、当の本人でさえ、あれは夢だったのかもしれない　という気もしているのだ。そんな話を信じる、という方が無理なのだろう。

「ああ、それから、タツル。お前の話で思い出したけど、昨日渡しそびれてたわ、コレ」

スクールバスの最後部座席に並んで座ると同時、美里がバッグから包装された小さな袋を取り出し、タツルの膝の上においた。

「これって」

「べ、別に　ただ、なんとなく、ほら、寒いと思って、さ」

寒いってどういうこと？　などと疑問符を浮かべながらタツルは袋を開けてみる。するとそこには、赤い毛糸で編まれたような指輪のようなものがあった。

「なにこれ」

「て、手編みの指輪だよ。んだよ、文句あんのかよ、ああ？」

「え、これまさか……？」

「うっせえな、そうだよ。一応、誕生日プレゼントってやつだ」

「み、美里お……」

何故指輪なのか追及するのは野暮だった。プレゼントを貰えたという事実が、タツルの冷えきった心を一気に加熱させる。すぐさま自分の人差し指にはめた。

サイズはぴったりというほどでもなかったが、それを訴えるほどに空気が読めないわけでもない。タツルはただ一言「ありがとう」

と言って、足をバタつかせて喜びを表現した。

「なあ、美里、これ、お前が編んだのか？」

しかしタツルのその何気ない質問に対し、美里は笑顔で切り返す。「いや、それこの前、何故かサタケに貰ったんだよ。で、キモいからお前にあげよう」と

「そおおおいつ！」

タツルは渾身の力で破り裂いた。

「あ、てめ！　なんてこと……っ」

「うるさい！　くそっ、俺はもつところ、俺のためのプレゼントが欲しいんだっつもの！　なんでサタケがお前に渡した呪いグッズの処理をせねばならんのじゃ！　美里のアホめ！」

バスが学校の裏門をくぐり、目的地へと到着する。タツルはふんと鼻を鳴らしながら勢いよく立ちあがり、バスを降りていく。

「……つたく、その呪いグッズのために、この私がどれだけ時間費やしたと思っただよ、バカ野郎」

その場に一人残された美里が頭を抱えてため息を吐いたことになど、タツルは気付きもしないのだった。美里は左手の指という指に無数に貼られた絆創膏を、右手の人差し指で優しくなぞってから、おもむろに立ち上がってタツルを追いかける。

「待てよ、タツル！」

「うるさい！　今の俺はタツルではない、ヤサグレンだ！」

「はあ？　キマグレンぶってんじゃねえぞ！」

タツルの平和な一日が、始まった。

\*

結論からいうと、タツルの平和な一日は、バスを降りてから九分四十三秒後に終了の鐘を鳴らした。

「あたしの名は、スピカ・メールシュトロ・ニルヴェイナ　宇宙からきたわ！　十五歳独身、職業は大国ニルヴェイナの姫！　よろ

しく！」

「はいいいいいい！？」

昨夜、風呂場にて裸体を晒した美少女が、エメラルドグリーンのツインテールを揺らしながら、教壇の上で威張り散らしていた。その眼はどこまでも真紅で、目つきは鷹のように鋭く、容姿は窮まっ  
て淡麗である。

そして、それだけではない。彼女だけではない。

？明らかにおかしい人？が、もう一人いたのだ。

「そして私がベルゼゴレ・ユリス・ハレアルト。姫様の永遠の家畜にして下僕にしてペットにして踏み台。？とりあえず私が毒見しますね？、が口癖の永遠の十八歳踏み台です」

もう明らかに二十代中盤、どうみても高校生ではないモーツァルトみたいな髪型の人が、普通に学生服を着て転校してきていた。何がおかしいって、彼が二度も口にした通り、文字通り彼は？踏み台？だった。

凜とした表情で教室を見渡すエメラルドの少女の下、彼は四つん這いで興奮しているようにみえた。何故かタツルにまでその興奮が伝わってくるほどだった。

「というわけで、この二人が今日からみんなのお友達です。よろしくしてあげてね」

「はーいっ！」

まるで小学校のようなやりとりで、極自然に謎の異国人がクラスメイトになったという現実。タツルの開いた口は一向に塞がる気配がない。何がどうなっているのか、さっぱり分からない。

ただ一つだけ、タツルにも、むしろタツルだからこそ理解出来る  
ことがあった。

「スピカさんは子守山くんの左隣、ベルゼゴレくんは子守山くんの  
後ろの席に座ってね」

「……俺の左？ ……あれ？ 俺の左って石塚さんの席じゃ……あれ、しかも後ろって山田の席のはずじゃ……」

「いえいえそこは空席です。石塚さんと山田くんは、今朝転校しましたから！」

「……先生、今何とおっしゃいました？」

少なくとも彼女たちは、？普通ではない何者か？であるに違いない。

そうでなければ、いきなり？こんなこと？を言われたりしないはずである。

「よろしくタツル。あたしはスピカ。あんたを身体の隅々まで調べるためにやってきたわ」

「よろしくお願ひします、子守山くん。私はベルゼゴレ。姫様に害を為すであろう君を、ひっそりと亡き者にするためにやってきました」

「……笑えない冗談は、好きじゃないなあ……ハハハ……」

真紅の眼差しを向けられるタツルは引きつった笑みを浮かべるだけで精いっぱいだった。

何故ならば、知っておくと便利な常識を一つだけ思い出したからだ。

そう　？瞳が赤い人間は存在しない？。

タツルは誰にも気づかれないうちに、小さくごくりと生唾を呑み込んだ。

\*

「どうなっただコレ……いや、マジで……」

一時間目が始まって数分、左隣及び背中からの殺意に耐えられなくなつて授業を抜け出したタツルは、現在二階男子トイレの個室に籠り、頭を抱えていた。

冷静になろうと努めるも、徒勞に終わってしまう。紅の瞳を持つ二人の人間が、何故だか明確な殺意をタツルへと向けてくるものだから、気が気ではなかった。



一人はエメラルドグリーン・ツインテールの電波少女。一人はシルバー・モーツアルトの変態青年。特にモーツアルトの方は絶対的に高校一年生には見えない。

あれは明らかに、？ 仕組みられた上で？ 編入してきているに違いなかった。

「俺が何したっていうんだよお……！！！」

タツルは個室の中、貧乏揺すりを激しくしながらわなわなと両手を震わした。

するとふと隣の個室から、

「君は>原初体<の分際で、高貴な麗人たる姫様の>定め《ヴァ》人<であると、そう予言されたんですよ。君が死ぬ理由としては十分であると　私はそう思いますけどね」

モーツアルトの声がした。

「モーツアルト！？」

「ベルゼゴレですよ、モツコリ山くん」

「モツコリ山ってなんだよオイ、子守山だよ！　じゃなくてっ！」

冷静にツツコミを入れている場合ではないと気付く。個室の壁一枚挟んでいるとはいえ、正体不明の年齢詐称変態紳士と二人きり、というシチュエーションはマズかった。

「……ていうか、いつからそこにいるんだよ！」

「君がここに籠るより以前ですね。軽く先回りしてお待ちしました」

「は、はあ？」

「>完成体<は君の人智を遥かに超えた存在なんですよ。私は君の監視が任務なので、行く先々に予め先回りしておくのは当然のことでしょう？」

言っている意味がさっぱり理解できないタツルは、いよいよ恐怖を感じていた。

少なくとも奴らは　電波である。関わってはいけない人種に違いなかった。

しかしそれでも、一つ気になることがあった。

「俺、あんたらに……何かしましたかね？ いや、電波的な回答ではなく、真剣に答えて欲しいんだけど。あんたとは初対面だし、あのスピカって子も……ほぼ初対面だし」

「電波的な回答に聞こえるのは仕方ありませんよ。私たちは遠い星からやってきた存在で、君たち地球人と比べるのもおこがましい程に、遥かに優れた文明を有していますから」

ベルゼゴレは隣の個室で、人を小バカにしたように笑う。

「お前……」

「まあ、私たちが君に干渉したい理由は、先ほど言ったことが全てです。君は>定め《ヴァ》人< 姫様にとつて重要な人物と成り得ることが予言されました。だから私は君を監視しているんですよ。まあ、監視といいますが、ぶっちゃけほとんど殺すつもりですけどね」

「ああ……はいはい、もう分かった、分かったよ」

絶対に近寄らないようにしよう、タツルは拳を握り締めて一人決意を新たにす。

彼らは本当に、どうしようもないくらいに 電波なのだということが分かった。

「あ。さては信じていないですね？」

「そんな意味不明アード、荒唐無稽な話を信じるほど、お人好しじゃないんでね」

瞳の赤はカラーコンタクトに違いない。すべては仕掛けられたトリックに違いない。ベルゼゴレのあまりに嘘っぽい話を聞くことで、逆にタツルは精神的に立ち直っていた。

ただの電波存在なのだと思信できた時点で、もうタツルにとってベルゼゴレやスピカは恐怖の対象ではなかった。

はずだった。

「じゃあ、これで信じますか？」

突如、音もなく個室の壁が突き破られる。タツルの左方より右方

に向かつて伸びた？蒼く機械的な腕？が、三つの個室を即座にして貫通していた。

凄まじい風圧で、タツルは便座から転げ落ちそうになる。目を開けるとそこには既に蒼い腕はなく、代わりにポツカリと空いた全長三十センチほどの穴が、一つずつ左右の壁に残されていたのだった。「え、あの……………え？」

口をパクパクするタツルの顔が一気に青く染まっていく。そんな様子を楽しげに、ベルゼゴレは左隣に空いた穴から顔を出して眺めていた。

「これで信じました？ 君たち地球人 > 原初体<sup>ファルム</sup>にはこんなこと出来ないでしょう。これが、> 完成体<sup>エリミナ</sup>という偉大なる種族の力です。私たちは君たちの進化系。宇宙からやってきた存在なんですよ」

真紅の瞳を怪しく輝かせながら、ベルゼゴレの巻かれた銀髪が重たく揺れる。

「君を監視し、かくして本当に姫様の > 定め<sup>ラ</sup>《ヴァ》人<sup>リエ</sup>く足り得るかを 見定めさせて頂きます」

\*

「……………ということがあったんだ。あいつらマジ絶対普通じゃない、やばい、前人未到の領域でやばい。かつてない大天災レベルにやばい」

「タツル……………やっぱ、頭打つたんじゃねえのか……………？」

「いや、こいつは前からこんなもんだろ」

昼休み。？奴ら？から逃げるようにして屋上にやってきたタツルは、美里とサタケに買ってきてもらったパンを頬張っている最中だった。

「嘘だと思つたら二階の男子トイレに行ってみろって……………個室に穴空いてるから」

「二階の男子トイレの個室……？ それならさつき僕が一発抜くために使ったばかりだけど、何もなかったよ！」

サタケは小憎たらしい表情で右手を上下に動かす、勝ち誇りながらいう。気持ちの悪い個室の用途については、絶対につっこまないようにしようと思ったタツルだった。

「……あいつら、壊したり直したり自由なのか……やばいな……」  
「お前の頭の方がやばいぞタツル。マジで病院行った方がいいんじゃないかねえか？」

やや心配そうな表情をする美里は、少しだけ可愛気がある。とはいえ、タツルの頭は至って正常、これまでに起こった出来事のすべては紛れもなく現実だった。

「それよりさあ、スピカたんって萌えるよね。僕、ちょっと早めのヤマザキ春のパン祭り来ちゃったかもしれないよ」

サタケは腰をくねらせながら親指を咥え、恍惚とした表情をみせる。

「大人しく春が来たって言えよ、気持ち悪い。つかお前、ああいうのがタイプなのか」

しっしと片手で煽ぎながら、美里がゴミを見るような視線をサタケへと投げる。サタケは大きく誇らしげに頷いて、

「ああいうツンデレっぽい子が好きなんだよ、僕は。だからミサたんも好きです」

「はあ？ 誰がツンデレだよ。一緒にすんなっつもの」

ミサたんこと美里がサタケの求愛を一蹴した。

「ああ、でも、いいなあ、スピカたん！ 何かプレゼントでも贈ってお近づきになろうかなあ……ぐふふ」

両手をわしゃわしゃさせて何かよくないことを妄想するサタケ。プレゼントという言葉聞いて、タツルはサタケが美里にプレゼントしたであろう毛糸の指輪のことを思い出す。

「……毛糸の指輪は止めておけよ、サタケ。気持ち悪がられるのがオチだぞ」

「はあ？　なんで僕がそんな呪いグッズみたいなものを渡さなきゃいけないんだよ」

「え？　だつておまつ、美里に」

「あー！　あー！　やべえ、空が青いぞ！　おいみるタツル！　空が青い！」

突然美里が大声を上げたので、タツルの言葉は誰にも届かなかった。

「うるさいよ美里！　まったく、空が青いのなんて当たり前　だ、る？」

耳を押さえながら空を仰いだタツルの眼に映ったのは　？　二体のロボット？。

タツルより少し小さい程度の真紅の機体と、真紅の機体よりも一回り大きい蒼穹の機体が、目視できる位置を陣取って空に浮かんでいた。

「おいおい、なんで……」

真紅の機体には覚えがある。そう、あれは昨夜、風呂場に突然現れた

「む。察知されたわ。ならば実験開始！」

おそらくは　？　スピカの別の姿？。

「あんたの力、早速だけど試させて貰うわよッ！」

衝撃的な、突き刺さるような着地。その機体の重みのせいか、屋上にピシリとビビが入った。真紅が立ち上がり、一歩近付く。蒼穹も続いて着地するが、こちらは真紅と違って物音一つ立たない静かなものだった。

「な、なに、あれ」

手に持っていたメロンパンを落としながら、美里が呟いた。

「赤い方は昨日俺んちの風呂場に突然現れたロボ。で、青い方は二階のトイレの個室に穴を開けたロボに一票　かな。さっき言ったる？　ははは……」

上辺だけの乾いた笑みを浮かべるタツルの目は、口元に反して笑

つていなかった。

「う、かつこいいやん……かつこいいやあぁあん！」

よく分からない関西弁もどきで叫ぶサタケ。

三者三様の態度で、タツルたちはその非現実に対峙していた。

「モツコリくん以外は邪魔ですね。とりあえず寝てもらいまし  
ようか」

「!？」

蒼穹の機体がふわりと浮かび上がったかと思うと、次の瞬間、美  
里とサタケが突然力を抜かれたかのように伏してしまった。

タツルの背筋に奔る悪寒。まさか、彼らは本当に

(俺を、殺すのか……!?)

無意味だと分かっても構える。一体、どうするべきか。

「あたしの>完全装鋼アムルディア< >鳳凰神紅プロミネス<は不死なる英鳥の化身。

昨夜のようにはいかないわ」

タツルが考えをまとめる前に、真紅の機体、>鳳凰神紅プロミネス<が火焰  
をその周囲に纏いながら、屋上を蹴って爆進した。

「おい、おいおいおいおいおい!!!」

向かってくる真紅から危険を察知したタツルは、思いきり真横に  
飛んで避けた。

「へえ、ならこれはどうかしら！」

タツルが着地と同時に勢いを殺すべく前転をした刹那、炎を纏つ  
た刀のようなものが、タツルを追撃すべく>鳳凰神紅プロミネス<より振り下  
るされた。

「くおおおおっ！」

煮え切らない叫び声を上げながら、タツルは反射的にそれを?掌  
でガードする?。

(つて俺のバカアアアッ! 熱い熱いあつ………あれ、熱く……  
ない?)

ガードの際に思わず目を瞑ってしまったタツルは、おそろおそろ  
両の眼を開いていく。

すると、そこには。

「な、な、な……………」

全裸の美少女が。

「なんでまたこうなるのよおおっ!？」

顔を真っ赤にして、震えていた。

「え、ええええええ!？」

スパアアンツ! と装甲が勢いよく弾け飛んで霧散する音が、遅れて聞こえてきた。タツルの目にはばつちりと、柔らかな四肢と二つの丘(おそらくBカップ)が映っていた。

自然、エロ顔になる。

「くっ、姫様! これを!」

蒼穹の機体が、瞬時にして生身の人間モードへと変身した。装甲の内より現れたのはベルゼゴレだった。膝を折ってその場で崩れるすっぱんぽん少女 スピカと違って、彼は学生服を着たままだ。彼女の素肌を守るために、ベルゼゴレは一瞬にしてトランクス一丁となり、身ぐるみをすべてスピカに譲る。

「あ、あの……………」

「ふえ……………ふええええ……………」

「その……………」

「また……………見られちゃったよう……………もう、無理だよ……………」

完全に戦意を喪失しているスピカはもう抱きしめたくなくなるくらい可愛らしかったが、それよりタツルはまた大泣きされるのではないかと冷や汗をかいていた。

「あの、えつと、スピカさん? 大丈夫、全然見えてないから、綺麗だったからさあ!」

「ふええええええええええええええええええええええ!」

轟音が、蒼天を切り裂いた。

スピカの大声は学校のチャイムの数倍の音量があるに違いないと、タツルは思った。

そんな中、騒ぎの原因を突き止めるべく、ドタバタと屋上へ登っ

てくる足音が複数。

タツルがやばいと思ったときには、もう手遅れだった。

「ど、どうしたの、何が……………え……………子守山……………くん？」

屋上のドアを開け放った教師が、絶句した。

教師の目に映っていたのは、ワイシャツを羽織る、はだけた感じ  
でわんわん泣く少女と、その少女の前でエロ顔をしている少年の姿  
である。

さらに少年の周りには数人ほどの生徒が意識を失って倒れている  
のだ。

これはもう 言い逃れが、出来ない。

「助けてベルゼゴレさん！ 俺の無実を証明してよベル……………えっ」

タツルは、自分と同じくピンピンしているであろう半裸のベルゼ  
ゴレに助けを求めようとした。が、当のベルゼゴレは何故か口から  
血を出してパンツ一丁で倒れていたのだった。

「こ、もり……………やま……………くん……………やられ、ました……………

……………わ、私は……………彼女を……………守ることができず……………くっ……………」

(くっ、じゃねええええ！)

ベルゼゴレの迫真の演技が、この状況に止めを刺した。

「子守山くん、職員室にきなさい」

「違うんです、違うんですよ先生えーっ！」

\*

「ああ……………疲れた……………」

タツルは職員室を出ながら、ため息を吐く。

起き上がった美里の証言で一応の無実が証明されたタツルだった  
が、そもそも日頃の行いが悪いなどといちゃもんをつけられ、職員  
室で長々と叱られたのだった。その表情には疲労が浮かび、顔はげ  
っそりとやつれていた。

「モッコさん、お疲れ様です」



「ああ！ てめっ、マジでふざけんなよ、退学するところだったんだぞこっちは！」

職員室を出てすぐのところ、新しい制服に着替えたベルゼゴレが「やつ！」と軽々しく手を振りながら待っていた。タツルは怒りのままに迫り、ベルゼゴレの襟元を掴んで可及的速やかに喧嘩を売った。

「おや、私に勝負でも挑みますか？ 意外と血の気があるんですね。死にたいんですか？」

「う……」

ああ、そうだった。

タツルはトイレの個室に空いた穴のことを思い出し、青ざめる。パツと襟元を離すと、口笛を吹いてごまかしにかかった。

「おや、やつぱり腰抜けでしたか。それでは姫様の＜定め《ヴァ》《<sup>リエ</sup>人くなんて務まりませんよ？」

「む……というか、その＜定め《ヴァ》《<sup>リエ</sup>人くつて、何なんだよ？」  
タツルはむつとしながらも、トイレでのやりとりの時から気になつていたことを尋ねる。

するとベルゼゴレは待つてましたとばかりに微笑み、  
「運命の相手のことですよ。非常に癪ですが、君は姫様の運命の相手選ばれたということですよ。これは私たちの国の風習でしてね。」

男女、齢十五たるまで従者以外の異性との接触を一切禁ず。齢十五にして、予言された＜定め《ヴァ》《<sup>リエ</sup>人くと結ばれる定めへと進まん  
「

ベルゼゴレは何故かどや顔をした。しかし、タツルがノーリアクションだったため、頭を掻きながら彼は続けた。

「予言とはすなわち、万物の未来を演算して出力する超科学の結晶です。私たちの科学は、我らが姫様と、愚鈍なる君が、将来において結ばれる運命であることを証明しているのです。通常、私たちは予言に従い、運命の相手　＜定め《ヴァ》《<sup>リエ</sup>人くと結ばれるべくして結ばれます。ただ、それは普通の場合の話。姫様のように存在自

体が貴重な方の相手が 異星人、ましてや、進化する可能性がゼロ以下の>原初体ファルム<風情であるなど、そんなことは到底認められないのですよ」

ですから、とベルゼゴレは声色を強める。

「君が亡き者になれば、姫様の>定めラ《ヴァ》リエ人<は不在となりま  
す。私は正直、今すぐ君を殺して、姫様を予言の呪縛より救って差  
上げたのですが 勝手に行動すると私の首が飛んでしまいま  
すので。仕方なく、今はあくまで？監視役？に徹しているというわ  
けです」

そう言つて、につこりと邪悪さを含めながら彼は笑つてみせた。

「な、なんで俺が、その定めなんちゃらつてのに 選ばれてるの  
さ」

タツルは一步退きながら尋ねた。正直ベルゼゴレの話を聞いたと  
ころで全貌はよく分かつていなかったが、自分が何かに勝手に巻き  
込まれているということだけは理解出来た。

「それが分からないから監視しているのです。君が超奇跡的に偶然  
進化するのか、あるいは姫様が退化するのか 前者ならば祝福し  
ますが、後者ならば私は迷わず君を殺します」

進化。退化。よく分からない単語ばかりである。

一方、ベルゼゴレの冷たく突き刺さるような声には殺意が込めら  
れていた。

「どうか私に殺されないように。精々気をつけることです」

「……あ、はい」

何故か素直に頷いてしまうタツルだった。

「それより、今日は委員会があるのでは？ 早く行ったほうがいい  
ですよ。『子守山くん遅いなあ』って、相方のよっちゃんが待つて  
ますよ」

「なんで転校初日にして俺のスケジュール把握してるのさ!？」

「……とまあ、そんな一日だったわけだよ。ロボに襲われるわ、変態扱いされるわ、今日のお兄ちゃんも苦労人です」

「にー……大変だったんですね……主に、頭が……」

場面は変わって子守山家のリビング。痴漢について報道するテレビを見ながら、タツルは愛すべき妹に事の顛末を話している最中だった。

しかし反応は分かりきっている。結局、？あれ？を実際に目の当たりにしない限りは、タツルのロボット&宇宙人・トークなんて夢物語でしかないのだ。

が、しかしタツルは諦めない。頭がおかしいと罵られようが、話してすつきりしたかった。なんせ、自分の中に抱え込んでいられない類の話だった。

「特に宇宙人の一人のベルゼゴレって野郎は卑劣さと変態さを併せ持った食えないヤツでさ。……あれ？ そっぴやあんだけ俺を監視するって息巻いてたのに、委員会以降はあいつの姿を見てないな……」

「大変ですね、にーは。陽菜は、今日も一日平和でした」

うーん、と唸るタツルとは対照的に、陽菜は太陽のような笑顔を覗かせる。我が妹ながら可愛いなあ、などと勝手に癒されつつ、タツルは彼女に質問をした。

「また美里んとこにでも遊びに行ってたのか？」

が、陽菜からの返事ほとんどもない類のものだった。

「いえ、今日はベルゼゴレさんと遊んでもらってましたです」

「はい！？ ベルゼゴレってベルゼゴレ！？ 今俺が話した卑劣宇宙人のベルゼゴレ！？」

その有り得ない単語に全神経が反応する。

がばりとソファァーから起き上がり、タツルは鬼神の如く妹の肩を掴んだ。

びくり、と小動物のようにおどおどしながら、陽菜は首を捻る。

「え、と、陽菜が遊んだベルゼゴレさんは、宇宙人じゃなくて、人間でしたよ?」

「髪型は?」

「なんか、ベーターベンみたいでした」

「あいつだ!」

把握するタツル。間違はなくあの男である。妹の陽菜を狙う邪な存在が、また一人増えてしまったことに不安を覚えた。

ベルゼゴレの目的はさっぱりだが、よからぬことを企んでいるに違いない。もしかしたら、タツルの周囲を探っているのかもしれない。

「陽菜。知らない人についていつちゃダメっていつも言ってるだろ?」

「そうなんですけど、飴くれて、いっぱいなでなでしてくれただんですよう……」

「なでなでならお兄ちゃんがいっぱいしてあげるからあつ!」

「に、に!。それは、シスコンすぎるです」

わしやわしやと陽菜のか細い髪を撫で上げるタツルに対し、陽菜は抗議の声を上げた。

「……で、あいつは何か言ってたか?」

「『かわいいかわいい、ぐへへへへ』って言ってました」

「あいつただのロリコンじゃないか!」

タツルは拳を握りしめる。こちらが委員会で放課後残っていた間に、まさか人さまの妹にそんな卑劣で低俗で野蛮な暴言を浴びせていたとは。

「よし陽菜、お兄ちゃんは決めたよ。明日から陽菜と一緒に小学校に通います」

「に、それはちょっと、陽菜、本気で引きます」

「うるさいやい! 俺は母さんに誓ったんだ!」

陽菜に顔を近づけ、鼻息を荒くしながら決意を言葉にする。

そう、タツルは母に誓っていた。亡き母親に代わって、妹を守っ

てみせると。使えない父親に代わって妹を守ってみせると。

それは面倒臭がり、逃げたがりのタツルが唯一守ると決めた誓いだっただ。

「たっだいまあ！ 父さん、この瞬間において帰還！」

……と、噂のタツルの？使えない父親？が帰ってきたようである。はあ、と再び大きく息を吐きながら、タツルは立ち上がり、振り返る。

リビングのドアが開け放たれると同時、

「てめえ！ この一週間どこ行ってやがった！」

「ハワイ！」

二つの怒声が、重なり合った。

「あんたはそうやって、いつもいつもおーっ！」

「にー、喧嘩した、めーっ、ですう！」

こんな大人にはなりたくない。妹を守ることが出来るのは自分だけ。

結局、家を長らく留守にしていた父親はお土産の一つも残すことなく

「タツル、誕生日プレゼントだ！」

そう言って、当面の生活費を置いていったのだった。

\*

「なるほど。タツルの父親は>原初体ファルムくのクセに、極めて>完成体エリミナに近い性格をしているようね。家族を何とも思わない 愛情の喪失。それは自然進化の道筋の一つ。もしかして、その血を引くタツルはやがて愛情を失って>完成体エリミナに進化を……？」

子守山家近隣の屋根の上で、うつ伏せになりながらスピカは小さく呟いた。彼女は電器屋で購入したばかりのビデオカメラを使い、窓から中の様子を拡大して撮影していた。

「そうですね。愛情を失って完成する、というのはよくある話です。

ただここは進化係数がマイナス18の死の星ですよ？ ？自然進化？は万に一つも有り得ません。無限分の一にも満たない確率です。むしろ私がいなければ、姫様の方が自然退化してもおかしくない星なのですから」

興奮気味なスピカに対し、ベルゼゴレはゆっくり説得するように喋った。彼はスピカと違って直立不動、腕を組んで仁王立ちをしている。

「自然退化ね……それってあたしが？ 自発的かつ驚異的に愛情を知る？ ってことでしょ？ 正直言つとね、あたし、ちよつと興味があるわ。あたしは愛を知りたい。ねえ、ベル、>原初体ファルムはあたしに愛を教えてくださいませんか？」

スピカは静かに思いを口にする。ベルゼゴレは小さくため息を吐いてみせた。

「なりません。私の>幻常維持アジャステリアくにも限界があります。姫様が自分から変わろうとすれば、私にそれを百パーセント食い止めることは出来ません」

「分かってる。でも、少しくらいなら大丈夫でしょ」

「……どうして愛を知りたいのですか？ 私たちにはそんなものは不要かと思われませんが」

理解できない様子で、ベルゼゴレは星を見上げた。

「>完成体エリミナくの愛情のない結婚。得だからという理由で考えることを放棄し、互いの損得に従って子を為して終わる人生。ベルは逆に、そういつたあたしたちの習性に疑問を抱かないの？ あたしたちは……何のために生きているの？」

「決まっています。我らが種、>完成体エリミナくを宇宙最多にして最高の存在にするためです。そのためにはまず合理的である必要があります。部分最適はやがて全体最適に至る。だから私たちは、自分を第一に考え、最適化せしめんと行動する。当たり前のことです」

「……あたしはそうは思わない。それを認めたら、あたしは大嫌いな父親と同じになる」

「陛下は完璧な方ですよ？」

「むしろあたしは完璧になりたくない。不完全だからこそいいのよ。そういう意味では、>完成体<より>原初体<の方があたしの理想に近いと思うの。ほら、愛は人を不完全にするものだってよくいうじゃない」

「不完全だからこそ、>完成体<に愛は不要なんです。それが何故分からないのですか？」

冷え切った空に、ベルゼゴレの鋭い言葉が響く。

「……姫様。今からでも遅くはありません。彼を殺して予言をやり直しましょう」

「ダメ。言ったでしょ？ そんなことしたらあなたはクビだって。

……彼はあたしに、愛を覚えてくれる存在かもしれない。だから今はまだ、様子を見たいの」

「……退化しても知りませんよ」

「それを止めるのがあなたの役目。なんとかしてみせなさい。>完成体<のまま愛を知れたら、あたしにとってはそれが一番理想だしね。それも前例がないわけではないんですよ？」

「まあ、そうですね……その前例のことは、よく知っております」  
ふう、とため息を吐くベルゼゴレ。スピカはにやりと笑ってみせた。

「あいつはあたしの>完全装鋼<に掌で触れることで、>二度も破壊してみせた。そんなことが出来るのはこの世でただ一人、>定め《ヴァ》人<だけ。つまりあいつは紛れもなく疑いようもなく、あたしにとっての>定め《ヴァ》人<なのよ。まずはその理由を調べたいの。>原初体<のクセに>定め《ヴァ》人<になり得る理由  
もしかしたらあいつは、特別なかもしれない」

「特別……そうですね。承知しました。？監視？を続行いたしましよう、姫様」

ベルゼゴレは深々と、執事の見本のようなお辞儀をしてみせた。スピカは僅かに微笑みを携え、

「ねえ　死の星って聞いた時はどうかと思ったけど、結構いい星だと思わない？」

などと、ビデオカメラを持ったまま立ち上がり、空を仰ぐ。彼女たちの星には存在しない大きな月がそこにあった。風が彼女の頬を撫で上げ、エメラルドの髪をふわりと浮かす。

「あたしはこの星が気に入ったわ。無限分の一と呼ばれる環境だけあって、なにもかもが新鮮。ここでしばらく、生活してみたいと思う」

しななく、という言葉を受けて、少しだけベルゼゴレの眉が動いた。

「しばらくとは……いつまで、ですか？」

「様子見が終わるまで。とりあえず、あいつがどんな人間なのか分かるまでね」

「分かった結果、彼が＜定め<sup>ラ</sup>《ヴァ》人＜足り得ない、くだらない人間だったらどうするつもりですか？　例えば？この男からは愛を学びたくない？と思えるほどに、嫌いになった場合　」

「そうね」

スピカはタツルにビデオカメラを向けながら、静かに呟いた。

「もしもそんなヤツだったら、そのときはあたしの手でソッコで殺すわ」

\*

「さて……そろそろ出てきたらどうです？」

月夜の下、ベルゼゴレはビデオカメラを回しながら、静かに呟いた。

スピカが「じゃああたし眠いから帰る。あんたは見張りを続けて。あ、これで撮影しといてよね！　一秒も怠っちゃだめよ！」などと　言って、ベルゼゴレにビデオカメラを渡して去っていったから数刻。ベルゼゴレは？もう一人の男？の位置を正確に捉え、問答する。



「……いつから気付いていた？」

「最初から。姫様はまったく気付いていませんでしたがね。しかし貴方には殺意がないようでしたので、様子を見ておりました。貴方は何者ですか？ 陛下の手の者ですか？」

闇夜に浮かぶ影に対して、ベルゼゴレは質問を重ねる。影は不穏に揺らめき、

「その通り。俺はキヤスバル。国王陛下の命令で、あんたを手伝いにきたんだ」

などと、強い口調でその目的を語った。

キヤスバルを名乗るその男は紛れもなく、完成体エリミナだった。男の肉体は黒い鎧に覆われ、騎士のような風貌をしていた。

「そうですね……しかし何故？ >三天元クラフターレたる私が一人いれば、十分だと思われませんが」

「そうでもあるまい。姫によって行動を制限されているあんたは、表だってタツル・コモリヤマを攻撃することが出来ていないはずだ。その点俺は違う。俺なら誰にも縛られることなく、堂々とターゲットを斬れる。だから俺が呼ばれたのさ」

「ふーむ……さすが陛下、状況を分かってらっしゃる」  
ベルゼゴレはキヤスバルに向かってビデオを向けながら、くすりと笑ってみせる。

一方キヤスバルは無表情に呟いた。

「理解出来たな？ では、これより俺はあんたの部下だ。さあ、一言命令してくれ。タツル・コモリヤマを殺せ、と」

「そうですね。では、一つだけ 頼まれてくださいますか？」

「ふっ、さすがに物分かりがいいな。あんたならそういうと」

「？ 目障りですので、消えてください？」

瞬間、蒼穹の腕がキヤスバルの胸を薙ぐようにして水平に振るわれる。

その圧倒的な速度についてこれる者は、完成体エリミナの中でも数えるほどしかいない。国王の遣い程度の者には？ 何が起こったのか？ す

ら理解が出来なかったに違いない。

ベルゼゴレは刹那の内に、カメラを持ったまま？複数の動作？をしてみせた。

「な……」

遅れて、黒騎士キヤスバルが？その事態？を理解する。その様子を横眼で眺めながら、ベルゼゴレは外巻きに巻かれた白銀の髪をかきあげ、にたりと狂気を込めて笑った。

「私の仕事は、？姫様を決して裏切らないこと？です。覚えておくといいですよ？」

「ああ……そう、かよ……そういうことか……つたく、くだらねえ男だ……」

キヤスバルの肉体が徐々に色を失い、消えていく。しかしそれはベルゼゴレの攻撃によるものではなかった。それはキヤスバルのコアの力 > 事故否定ラックラックによるもの。

「なるほど、貴方が呼ばれた理由が分かりましたよ。貴方は私同様に、死の星に強い」

薄れゆく敵の姿。しかしベルゼゴレは決して追いかけない。

ビデオカメラを回し続けることを、彼は義務付けられていたからだ。スピカの命令は、絶対なのである。

「明日を、楽しみにしているがいい……」

「明日ですか？ 気が早いですねえ」  
消えゆく影。

向けられる感情を軽くあしらいながら、ベルゼゴレはつまらない任務に戻る。すやすやと寝息を立てるタツルを撮影するだけの本当につまらない任務に。

「あ、しまった、ビデオカメラ回しっ放しでした……」

そこでベルゼゴレは、わざとらしいくらいにハツとした動作をみせる。

「うーむ、私が陛下に子守山くんの暗殺を命じられていたことが、このビデオを通して姫様に伝わってしまうのでは？ うー……コホ

ン。この映像を観てらっしやる姫様！ 私は無実です！ 陛下には確かに暗殺を命じられてましたが、今は姫様の命令優先ですので！」  
ビデオに向かって無実を必死に主張するベルゼゴレの姿は、しかし残念ながら非常に噓っぽくて、なおかつ胡散臭い。

「ま、これだけ言っておけば大丈夫でしょう、ふう、危ない危ない」  
何故かやりきった表情で、ベルゼゴレは月を見上げた。

\*

「おはよう、タツル」

「あ、ああ、おはよう」

「おはようございます、モッコリタマくん」

「モッコリタマじゃなくてモッコリヤマな。じゃなかった、子守山な。いい加減覚える！」

当然のように登場し、挨拶を交わしてくる宇宙人二人に普通に反応するタツル。

今日も今日とて、いい具合に非日常なのだった。

「まったたく……なんでこんなことに……」

奴らは宇宙人。それはもはや確定事項である。

実はタツルは昨日の委員会の後、サタケと美里に？二体のロボ？の話を振ったのだが、二人は何一つ覚えていなかった。

記憶操作はSFの常識である。そもそもロボに変身出来る人類はこの世に存在しないわけで、とりあえず、奴らが人間ではないということは疑う余地がなかった。

となれば、やはり奴らに近づいてはいけない。

タツルは奴らと絶対に視線を合わせないようにと、精一杯努めることに決めた。

決めたはずだったのに。

「はい、タツル！ 見て、あたしお弁当作ってきたの！」

「どうせ毒だろ！？ 毒なんだろ！？ 食べないよ！」

「はい、タツル！ 開いて、あたしが書いた秘密のノート！」  
「どうせ開いたら呪われるんだろ！？ その手には乗るか！」  
「はい、タツル！ 飛んで、この窓から、外に！」  
「普通に飛び降り自殺を勧めてるだけじゃん！ 身も蓋もないよ！」  
……何故だかスピカに付き纏われ、この日一日、タツルは大変な目にあつた。

\*

「ああ……もう俺の聖地はここだけだ……」  
二階のトイレの個室に籠りながら、タツルは涙そうそう、深い悲しみをその身に宿す。  
奴らから身を隠すにはここしかない。トイレこそがタツルにとっての最後の砦である。

が、しかし、その強固な砦も。  
「大変ですね、タツルくん」

易々と、異星の監視者によって侵略されてしまったわけで。

（まあ、そうですね……そうなりますよねえ）  
もはや安息の地なんてない。タツルはこの瞬間、それを悟った。  
ふう、と息を吐いて呼吸を整える。こうなったら、逆に質問を浴びせてやる。

「あのさあ……あんたらは結局、俺に何を求めているわけ？」  
隣の個室にいるであろうベルゼゴレに対し、タツルは挑発的な態度で質問を投げた。

「別に何も。私は個人的に、君に？ 進化？ して頂きたいと思っ  
ていますがね」

ベルゼゴレの返答はどうも要領を得ず、意味不明だった。  
が、タツルも今回ばかりは食らいつく。秘密を暴く。そういう  
目的意識があつた。

「進化ってなんだよ。俺はどこのゲームキャラみたいにほいほい

進化はしないと思うぞ」

「もちろん、存じておりますよ。ここは進化係数マイナス18の惑星ですからね。ただ 私には？マイナスを食い止める力？がありますので。あるいは、君が進化する可能性も有り得ると 昨晚、そんなことを思ったわけです。？自然進化？は無理でも、？不自然進化？は君にも可能かもしれない」

さらに、よく分からないのだった。

「よく分からないけどさあ、なんであんたは進化してほしいのさ、俺に」

ベルゼゴレの目的。タツルは、その核心を突いた。

「>完成体エリミナとは>完成体エリミナとしか結ばれないからです。>原初体ファルムが>原初体ファルムとしか結ばれないのと同じこと。つまり、姫様の>定め《ヴァ》リエ人<たる君と姫様が結ばれるには、姫様が退化するか、君が進化するか そのどちらかしか有り得ません。もちろん、姫様に退化されては困ります。ですから、予言を成就させるには君に進化をしてもらう必要があるのです」

「いやあ……というか話がぶっ飛びすぎてて……」

タツルは頭を掻いた。分からないなりに整理すると つまり、スピカとタツルは貴族と平民の許婚のようなもので、二人が結ばれるためにはタツルが貴族になるか、スピカが平民になるしかない、ということだろう。しかしタツルは考える。そもそも、こちらの都合は？

「つーか、結ばれるとか結ばれないとか、そっこののは好きかどうかで決めることだろ？ 予言だかなんだか知らないが、そっこの星の意味不明な風習に俺を巻き込むなよ」

「じゃあ、死にますか？ 結局君には二択しか用意されていないんですよ。進化して、姫様と結ばれるか。それが叶わず、私に殺されるか」

ベルゼゴレのゾツとするほど低い声に、タツルは絶句した。もうこの手の絡みはとりあえず止めよう 本気でそう思ってしまっほ

どに。

「ああ、そうそう、死にたくないのなら、姫様に好かれるように努力した方がいいですよ」

「……え？」

「？三択目？があつたのを思い出しました。姫様が君を嫌いになつた場合、姫様によつて君は殺されるそうです。姫様が言つていたので間違いはないですよ。彼女は皆の反対を振り切つてこの星にやってくるほどに、有言実行を是とする方です。本当に殺すらしいので、死にたくなければ嫌われないように精々頑張つた方がよろしいかと」

「ちよ、待つ……マジで？」

「君は殺される？？本当に殺すらしい？という部分が強調されて伝わつた。」

嫌われたら殺される？ そんな傍若無人なことが、有り得るのか。

「姫様は嘘を吐くタイプに見えますか？ それによくある話です。> 定め《ヴァ》人<が気に喰わないから、殺して予言をやり直す。」

我らの国では人殺しは罪ではないので、まったく問題がありません。気に喰わないなら殺しちゃえばいいんですよ、基本的にね」

「ぶつそうだよ！ その考えぶつそうだよ！」

タツルは大事なことなので思わず二回言つた。気に喰わないという理由で殺されては、さすがのタツルも死んでも死にきれなさそうである。

「ちなみに姫様は、この国でいう、サムライのような人がタイプのようにですね。男らしさをアピールしていかないと、そろそろ危ないですよ？ 今日の君は姫様から逃げてばかりで、まったくサムライらしくないですから。あ、ちなみに屋上の時は、姫様は手を抜いておられましたので、勝てるとは思わない方がいいです。姫様が本気なら二秒で死にます」

「ちよ、ちよつと、どうしたらいいの俺。ねえ、どうしたらいいの俺！」

タツルはパニックに陥っていた。スピカの機嫌を損ねた時点で殺されるかもしれない。屋上襲撃のときはどうにかなったが、手を抜いてたなんて言われた日には、もはや次も無事でいられる保証なんどこにもなかった。

「そうですね……次の体育、男女混合ドッジボールをやるらしいので、そこで男らしさをアピールしてみても？ 名付けて、？ドッジボールでキラッ？ 作戦です」

ベルゼゴレはからかうように言う。タツルはネーミングセンスには突っ込まなかった。

「あとは、ほら、サムライらしくとりあえず語尾に？ござる？をつけてみるとか」

「おい、それはちょっとふざけてるよね？」

「一人称を？拙者？にしてみるとか……くくっ」

「今ちよつと笑ったよね！？ ねえ、絶対ふざけてるよね！？」

宇宙人にいいように扱われる高校一年生の姿がそこにあった。

「ああ、それと、君の妹の陽菜さんと昨日遊んだんですよ」

「……っ！ そうだ、あんた勝手に人の妹を」

「可愛いので、母星に持って帰ってもいいですか？」

「ダメに決まってるだろ！」

\*

結論からいうと、タツルの？ドッジボールでキラッ？ 作戦は失敗に終わった。

スピカと違うチームになったタツルは、彼女が放つ人外の剛速球を涙目でかわすことしか出来なかったのだ。

「そっやって女子を盾にして！ 避けるばかりで！ 反撃もしないッ！」

「た、盾にしているつもりはないんですけどおおっ！」

味方がバタバタと倒れていく中、持ち前の反射神経のよさでしぶ

とく生き残るタツルだったが、きつとスピカにとってはそれが男らしくなく映ったのだろう。

「ほら、反撃なさい。あたしに向かって投げてきなさいよ、意気地なし！」

「む、無理だつて、勝てねえよ絶対、俺はただの人間だぞ!？」

「そう　あんたは、反撃も出来ない　腰抜けなのね」

「う、うるさい！　俺は？お前らとは違う？んだよ！　さつさと星に帰れ？化け物?!」

「　そう」

その一言が、おそらくはスピカに？その決意？をさせたのだろう

とタツルはその時を振り返って思う。タツルにとっては無意識に反論しただけだったのだが、スピカはそう捉えなかったのだ。彼女の目つきは、この時より鋭さを倍にして一変する。

「よく分かったわ、タツル。あたしはそんなあんたを　？好きになれそうにない？」

瞬時にして展開される真紅の装甲。鬼気迫る異星の機神、その名を>鳳凰神フロウネクス紅く。

「あたしに殺されるようなら、所詮そこまでの運命よ。今度は本気でやるわ」

壮大な鬼ごっこはそんな形で、幾分あっさりとした形で開幕したのだった。

「　死ぬ気で、生きなさい」

\*

学校外の街並みを疾駆する影が二つ。

一つはタツルのもので、もう一つは真紅のものだった。

「や、やめるでござるよおー！　拙者、まだ死にたくないでござる！」

口調だけでも必死にサムライぶるタツルだったが、もう後の祭り



でしかない。

炎の化身たる>鳳凰神紅フロミネスは、一向にその手を緩めなかった。

何故かベルゼゴレが全く手を出してこない（そもそも追ってこない）ということが不幸中の幸いだったが、それでもいつまでも人外の力を避けきれぬ自信なんてタツルにはない。

（ただ、俺の勘が正しければ……スピカの装甲に触れば、彼女を無力化出来るはず……）

人目を気にせず、制服を汚しながら街の中を駆け回り、タツルは考えを巡らせる。よくよく考えると、タツルは二度に渡り彼女の装甲を無効化しているのだ。

おそらくそのきっかけは、掌。

装甲、及び彼女の武器を掌で触れば　おそらくその瞬間に、勝負は決する。

先ほどから遠距離攻撃しか放ってこないスピカの様子からも、それは真実だと思われた。

ただ問題は、近付くことが出来ないということである。

（無理無理無理無理無理いいっ！）

>鳳凰神紅フロミネスが片手に持った刀のような武器。彼女がそれを使って一閃する度に、炎の刃が真空を裂いてカマイタチの如くタツルに迫った。そしてその飛翔する刃は一对ではない。二対、三対と、とにかく増え続けるのだ。　まさに、弾幕と呼ぶにふさわしい、それ。

最初は反撃も考えたタツルだが、すぐに思考は塗り替えられた。

よし　逃げよう、と。

\*

（人類の文明の利器を使えば……！！）

裏道を重ねながら駆け。人ごみに紛れながらホームへ。

さすがのスピカも一般人を巻き添えにはしないだろう　という

タツルの狙いは正しかった。人ごみに紛れた時点で、彼女の攻撃はピタリと止まる。彼女は既に、タツルの位置を把握できていないに違いなかった。

「よっしゃ……余裕！」

このままとりあえず自宅に帰ることに決めたタツルは、一人電車に揺られて安堵した。

一瞬不安になって辺りを見回したが、神出鬼没のベルゼゴレもない。完全勝利である。

の、はずだった。

「にしてもこの後どうするか……って、えええええ！？」

「遅かったわね、タツル？」

駅の降車ホームで待ち構えていたのは、ツインテールを揺らす、笑顔のスピカさん。

彼女はタツルの家の最寄り駅で待ち構えていたのだった。

「今度は逃がさないわよ！」

叫んで刹那、彼女は>鳳凰フロミネス神紅<へと変貌する。タツルは無言でダッシュした。脇目も振らず、改札を抜けて、ロータリーに出るところで、

「逃がさないって言うてるでしょ？」

「妖怪かよチクシヨオオツ！」

もはや恐怖だった。宇宙人は尽く先回りが趣味らしい。なんとまあ、悪趣味なことか。

「少しは反撃したらどうなのよ……！！！」

「勝てない勝負はしない主義なんだよ、地球人って種族は！」

「情けない……！！　あまりにも情けない！！　あたしの夢を返して。返さないよっ！」

「知るかあーっ！」

意味の分からない台詞と爆撃をかわしながら、タツルはひたすらに逃げる。制服のところどころが焼け焦げており、ギリギリにもほどがある状態だった。それでもタツルはなんとか致命傷を避け続け

て走りきる。

気付けば、無意識に自宅の前に到着していた。

「反射神経と逃げ足だけは一流ね」

「はは……どうも」

「でもそれもここまで。観念しなさい。これ以上逃げるなら、あんなの家を焼き尽くすわ」

息を切らすタツルを尻目に、真紅を纏ったスピカが刀を構えた。

(……え、なに、燃やす……?)

タツルはハツとする。そんなことをさせるわけには、いかな  
い。

「待て、それは困る！ 俺には妹がいるんだよ。ここには手を出す  
んじゃねえよ！」

自宅の前で仁王立ちをしながら、タツルは額に汗をかいた。もう  
きつと陽菜は家に帰ってる頃で、部屋の中でくつろいでいるに違  
ない。もしかしたら美里の妹と遊ぶために出かけているかもしれ  
ないが 二階の電気がついているのが窓から見えたので、それはな  
いと断言できた。あの部屋は陽菜のものであり、彼女はどんなに明  
るくても電気をつけずにはいられない、生粋の怖がりなのだ。

だから家に火をつけられるのは、本気で、真剣に、心から、困る。  
「へえ？ そんなに家族が大事？ 羨ましいわね。あたしにはそん  
な感情はない。一人で完成しているから、家族に関わる必要がない  
の。 なんか、ムカつくわね」

スピカは機嫌を損ねたのか、刀に纏わせる炎の出力をさらに上げ  
た。

その視線の先には、子守山家。タツルは危機を察知し、全力で玄  
関に踏み入る。

「くそがつ！」

とにかく妹を守りたい。燃やされてたまるか。タツルは二階に駆  
け上がり、炎が外で出力を上げる中、妹の部屋のドアを開け放った。  
すると、そこには。

「……………え？」

想像していたことの遙か斜め上をいく、信じられない、光景。そこにいつもの明るい空間はなかった。

陽菜が　血で彩られた水たまりを作って、顔を横向きにして、うつ伏せで倒れていた。

その表情には生気がない。息もしていない。

完全に、事切れている。静止している。停止している。

動かない。立ち上がらない。瞬かない。

「お、い……………」

血液と思われるくすんだ赤色が、床だけでなく、壁や天井にまで飛び散っている。

果たしてどんなことをすればこうなるのか　タツルの胸の内が熱くなる。

そしてその怒りの矛先は、必然的に？それ？に向かう。

陽菜の上に立つ者。ハルバードのようなものに血を滴らせる黒鎧に身を包んだ騎士。

「お前、一体、人の妹に……………何、を……………」

絶句する。拒絶する。否定する。封印する。

しかし、出来ない。出来ない。出来ない、デキナイ

「うあああああああああああああ！」

黒き騎士の風貌を持った？それ？に対し、タツルは突然殴りかかる。しかしタツルにとつての渾身は騎士の掌で容易に受け止められ、

「ふん、ようやく来たか。あまりに遅いものだから、？くだらん女を殺してしまつたよ？」

そのまま弧を描くようにして投げ飛ばされた。

「くうっ！？」

窓を突き破り、二階から外に放られる。隣の家の木に引つ掛かりながら、大きな音を立ててタツルは背中から落下した。

「え……………？」

その様子を見て、放火せんと外で構えていたスピカの表情が突然

曇る。そんなことはお構いなしに、黒騎士は窓から飛び降り、彼女の前に着地してみせた。

「む……姫、か」

「あ、あんたは……ベルのビデオに映っていた男……!？」

真紅を纏ったスピカが声を荒げる。しかし漆黒を纏った彼女の同族は、ふんと鼻を鳴らすのみだった。その屈強なフォルムはスピカの>鳳凰神紅フロミネスと異なりあちこちが角ばっている。肩の部分から突き出した二本の角が、黒騎士の強靭さを主張していた。

「……俺はあんたに要はない。タツル・コモリヤマに用があるんだ。そこをどけ」

「はあっ!？ ふざけないで、あたしは」

「ざけんなよ、てめえ!」

スピカが炎の刀を黒騎士に向けて構えると同時、タツルが立ち上がる。黒騎士を睨みつけ、全力で叫び訴えた。

「なんで俺の妹を殺した……!!」

「……え? ……妹……殺……?」

尋常ではない様子のタツルを見ながら、スピカの口から疑問が呟かれる。

タツルをあざ笑うように、黒騎士はくっくと兜の下で笑いながら答えた。

「殺した理由? 暇だったからだ。いつまでも貴様が家に戻らない

だから殺した」

「ふざけるんじゃないよ」

「ふざけてなどいない。学べよ、>原初体ファルム。他人の命などに意味はない。家族を殺されたところで、貴様は生きているだろう?」  
にも関わらず感情を乱すのは 不完全な証拠だ」

「黙れ……てめえと話すことなんざ何もねえ」

タツルはもはや何も考えられない。目の前の甲冑が、とにかく憎くて仕方がなかった。

「ならばどうする?」

「ぶつ殺す」

「それは不可能だ。>原初体ファルム<は>完成体エリミナ<には勝てん」

刹那、タツルより早く黒騎士が動いた。彼は道路を蹴って最大加速、スピカを素通りし、タツルの腹部を抉るようにして膝で蹴りあげる。かつて経験したことがないような、痛みを通り越した衝撃がタツルの全身を駆け廻った。

ゴキリ。それはおそらく、何かが折られた音。

思わず嘔吐しながら、しかしそれでもタツルは一步も退かなかつた。

「はっ、そんなものが……効く、かよっ……陽菜が受けた……苦痛に比べれば……!!」

「バカ、引きなさい、タツル……!! あんたが敵う相手じゃないわ! そいつの言うとおり、>原初体ファルム<では>完成体エリミナ<に勝てない!

絶対に! だから、逃げなさい……今すぐに!」

スピカが鋭く捲くし立てるように叫んだ。先ほどまでタツルを殺そうとしていたことなんて完全に棚に上げ、何故か彼女はタツルを逃がそうとしていた。

しかし、タツルが命令に従う理由がない。

「……逃げる? 俺が? ……ふざけんじゃねえぞ! 俺は母さんに、誓ったんだ! 守るって、誓ったんだ……!! それなのに、そんな約束も守れないで……くそが! そんな自分のまま、逃げていいことなんか一つもねえよ!!」

死をも厭わぬ覚悟で、タツルは黒騎士に殺意を向けた。逃げるという選択肢は皆無。向けるべきは怒りであり拳。考える必要はなかった。

タツルは目の前の目標を、ただ冷徹に

「だからぶつ殺すっつってんだ!」

打ち砕く。

「!?! どこにこんな力が……!」

腹部を殴られ、黒騎士がよろめいた。タツルはさらに蹴りを入れ、

肘を入れ、連撃を重ねる。人の身にして、一時的に 完成体<を圧倒してみせる。<sup>エリミナ</sup> タツルは>

だが、それもやはり一時的でしかなかった。

「しかし……所詮は>原初体<!!」<sup>ファルム</sup>

漆黒のハルバードが振り下ろされる。鋭利なその切っ先がタツルの左肩に突き刺さった。

「……っ！」

ああ、これで終わりか。

あまりにも呆気ない 自分の最後。

それでも、タツルは意識が途切れるまで諦めなかった。

「な、なんだこいつは……離せッ！」

薄れゆく意識の中、渾身の力でハルバードに食らいつく。タツルは口の中に血の味を感じながらも、黒騎士の腹部を思い切り蹴飛ばした。

「離せええええッ！」

そうして最後に。

ハルバードで両断されながら。

タツルは、誰かの声を聞いた気がした。

「もしかしてそれが 愛ってヤツなの？」

\*

「ちっ……思わず殺してしまったか……」

「何なのよあんた。もしかして、あいつの命令？」

命の灯を失ったタツルから、スピカは黒騎士へ視線を移す。静かに刀を構え、集中した。

「国王陛下は予言を危惧しておられた。しかし気に病むこともない。姫は再度予言を」

「あたし、あんたを殺すことにしたわ」

黒騎士の台詞を裂くようにして、スピカは強い口調で言った。

「いや、残念だが……俺の任務はここまでだ。姫　あんたを殺す理由がない」

黒騎士はハルバードを消失させ、踵を返した。彼の中でやるべきことは、すべて終わっていたのだ。しかし、スピカがその行く手を遮る。

「……どけ。遊んでいる時間はないんだ。ベルゼゴレのヤツがやってくる前に、さっさと帰りたいんだよ、こっちは」

「どくわけないでしょ？　あたし、こう見えて怒ってるんだから」  
「笑っているように見えるが？　>原初体ファルムくが死んで怒る>完成体エリミナくなんぞ存在しないさ」

「ここにいるわよ！　なんか文句ある！？」

瞬間、火花が散った。

スピカの鋭い一閃を、黒騎士が再び具現化したハルバードにて受ける。

「くっ」

黒騎士が苦言を漏らした。スピカの駆る>鳳凰神紅フロミニクスくは発展途上だが、ここ一番という時にパワーがある。ぶつかり合いの際、彼女が押し負けるようなことは

「ぐうっ！？」

まず、有り得ない。

「遅いわっ！」

敵の武器を弾いたスピカは、隙を突くようにして二撃目を放つ。

黒騎士の装鋼を、轟音を伴って砕き、斬り裂いた。

「っ！　とんだお転婆娘だな。仕方あるまい、>鳳凰神紅フロミニクスくなら死にはしないだろう……！！」

>完全装鋼アムルディアく。砕けた鎧を再生さえ、纏いなおしたその男は、ハルバードをキャノン砲のような状態に変形させ、狙いを引き絞る。

「しまっ……」

彼女が回避に意識を集中させるより早く、その砲撃は放たれた。隣の家ごと破碎する勢いを持った、強力無比な一撃。



が、その砲撃が爆発することは なかった。

「……………なん、だと？」

一瞬にして木端へと変わる、彼の武装。

そんな様子を眺める一人の男が、レイピアをくるくると回しながら底知れぬ殺気を放つ。

「また会いましたね、キャスバルさん」

銀髪をなびかせながら、生身のベルゼゴレは悠然と闊歩する。真紅と漆黒の間を縫うようにして歩き、そして。

「そしてさようなら」

？攻撃対象を、微塵に粉碎する？。

「……………あつ……………？」

認識とともに存在を抹消され、必然的に息を引き取る黒騎士。その愚かなる完成体<sup>エリミナ</sup>は、天元の名の者に天誅を下される。後は語る口もなく、無粋に消えゆくのみである。

「 罪状は、？姫様への攻撃？。我が剣にて、制裁の完了を確認  
」

怒りを含んだ冷徹な視線を投げるベルゼゴレは、レイピアをふわりと浮かせ、消失させる。そうして、腰を抜かしている姫君に手を差し伸べるのだった。

「お怪我はありませんか？」

「……………あたしは無事。っていつかあんた何してたのよ」

「いやいや、？あんたは手を出さないで学校にいなさい？って姫様が言うから私はっ！」

「ああ……………そうだったかしら。まあいいわ。それより、よくもあたしの獲物を……………じゃなかった、救いたい人間が一人、いや、二人いるの。あんたも少し力を貸しなさい、ベル」

「姫様、しかしそれは協定違反」

「ベル。命令よ」

「……………本気ですか？」

「命令よ」

「……タツル・コモリヤマだけでなく、ハルナ・コモリヤマもですか？」

「そうよ」

「はぁ。分かりましたよ。どうなっても知りませんからね？」

立ち上がったスピカは静かに、アムルディア完全装鋼くを解除し、制服姿に戻る。そうして、血を流して倒れるタツルの姿を眺めながら、力強く言葉を紡いだ。

「力を貸しなさい、>フロミネス鳳凰神紅く 不死なる英鳥の具現！

>フェムリル不死鳥く！！」

瞬間、エメラルドグリーンの輝きが、街全体を覆った。

\*

「……ここ、は？」

眩しい朝日に当てられて、タツルは目を覚ました。

ぼんやりとする頭が、やがてクリアに。タツルにとって見慣れた天井が、そこにあった。

しばらくして、すべてを思い出す。

「そうだ……陽菜ッ！」

「あ……あああ！ にー、にーが、起きましたですう！」

「……え？」

陽菜の仇、などと叫ぼうとすると同時、当の本人がタツルの部屋のドアを開け放って現れる。タツルは絶句し、二、三度瞬いてみたが、しかしそれはどうみても陽菜なのだった。

「なるほど、つまり、夢か」

なーんだ、と納得するタツルはそのままベッドへ倒れ込む。しかし、違和感を感じた。

左肩のあたりがやけにむずむずするのだ。

「なんだ……？」

上体を起こして、着慣れたジャージを上半身だけ脱いでみる。す

るとそこには、大きな怪我を縫い合わせたかのような、謎の痕跡が存在していた。

「ええええ！？ なにこれ！」

「あは、にーはね、一回死んだみたいです。あとね、陽菜も死んじやつたみたいなんです」

「はい！？」

笑顔で不穏なことを言つてのける陽菜。こんな冗談をいう妹だつたつけ？ などと不安になるタツルだったが、

「夢じゃないってことよ。あの日のことは全部、何もかもね」

「うおつ！？ お前が何故ここに！」

突然のスピカ登場で、一気に危険信号が赤に変わったのだった。

「命の恩人に向かつての第一声がそれ？ こっちは寿命削つた上に犯罪に手を染めたのよ」

ぶつきらぼうに言い捨てるスピカは、だぼだぼのTシャツ一枚というラフな格好だった。ズボンのものは履いておらず、髪はぼさぼさ。まるで自宅のような振る舞いだ。

「スピカさんは、陽菜たちを、ソセーしてくれました。天使様だったですよ！」

「はあ？ ソセー？ 天使？」

タツルは喧嘩腰に疑問を口にする。いきなりちんぷんかんぷんだった。

「蘇生よ。さつきから言ってるじゃない、命の恩人だつて。あたしはね、あんたとあんたの妹を生き返らせてやったの。あんたの肩のふさがつている傷がその証拠。あんた両断されたのよ？ それが治つたんだから、ありがとうの一言くらい、あつてもいいと思うけど？」

「……………マジ、で？」

「あたしは不死なる英鳥の具現たる>プロミネンス鳳凰神紅<のコアを持つ>完成体<。死んで間もない人間なら蘇生させることが出来るのよ。あたしの星の科学は、あんたの星の数億倍進んでいるんだから。あ

たのその傷跡も、多分明日には完全に消えてなくなるわ」

「あ、ありがとうございます……!!」

状況をようやく呑み込んだタツルは、土下座をするように深くとお辞儀をした。そう　子守山家の教訓として、母より受け継いでいた言葉があったのだ。

？恩は返してこそ忠義？。

スピカが本当に陽菜とタツルを蘇生してくれたのだとしたら、それはただの命の恩人というレベルではない。

人生を賭しても、返せるかどうか分からない　そういう次元の、恩だった。

「……陽菜が生きている」

ぼそりと呟くように、一言目。

「陽菜が……生きてる……ッ」

涙を流しながらの、二言目。

「陽菜が……生きてる……生きてやがる……ッ！」

愛すべき妹を思い切り抱きしめながらの、三言目。

「にー、苦しいです……」

本当によかった。そう、思えた。

タツルの人生は　まだ、捨てたものじゃ、なかった。

\*

「というわけで、あたしはここに住むことにしたわ」

お昼頃。今日が土曜日だというのをいいことに、泣きつかれて二度寝をしたタツル。起床と同時に、衝撃的な一言が彼を待っていた。

「う、うん……そうだな、うん、命の恩人だもんな……そのくらい……」

とはいえ、恩人の言うことは絶対である。　恩は返してこそ忠

義　母からの唯一の教えを破るわけにはいかない。タツルは、甘

んじて受け入れることにした。

「ちなみに、私もここに住むことにしました」

「う、うん、そうだな……あんたは関係ないけど恩人の仲間だもんな……」

ベルゼゴレの方は正直蹴り飛ばして追い出したかったが、タツルは耐えた。恩人の仲間たる>完成体エリミナくを、無下に扱うことはもはや不可能だった。

「そうそう、タツル。あたし、あんたを殺すこと、もう止めたから」  
「え？ ああ、うん、そういえば、俺、君にも殺されかけてたね……」

スピカは命の恩人だが、そのちよつと前までは完全に殺し屋だったことを思い出す。

「けど……なんでなんだ？　なんで君は　俺たちを生き返らせた？」

タツルにはそこが分からなかった。あれだけ殺す殺す息巻いて追いついてきた拳句、死んだら蘇生だなんて、意味不明にも程がある。「あんたを見直したから。あんたは腰抜けなんかじゃなかった。もう戻ってこない家族のために、あれだけ必死になれる人間は>完成あたし体たちくの星にはいない。上辺だけそうだっていう連中ならいるけど、あんたは違った。死ぬ間際まで諦めないあんたはなんていうか、その」

少しだけ顔を赤らめながら、スピカはそっぽを向いた。

「……その？」

「ちよ、ちよつとだけ、その　ええい、どうでもいい！　とにかく、あたしは学んだのよ！　>原初体ファルムくには>完成体エリミナくが持っている何かがあるって！　それは？　愛？！　あたしはね、この家で一緒に暮らせば、そういうのがあたしにも分かるんじゃないかって……そう思ったのよ！　だから、あんたたちに死なれては困るの！　そういうことよ！」

一気に捲くし立てるスピカは、なんだか可愛らしかった。タツル

はちよつとだけほつこりとした気分になりながら、小さく「そうかと呟いた。

「べ、別に、あんたをあたしの>定め《ヴァ》人<だつて認めたくないじゃないんだから！ あたし、全然あんたのことなんか好きじゃないし！ ただ 殺すのは惜しいって、思ったっていうか、その

「姫様。その辺りにしておいては？ どんどん墓穴を掘っていくよ  
うです」

「墓穴！？ なによそれ！」

まごまごとするスピカに対し、しれつとした様子でベルゼゴレが言った一言。

スピカは顔を真っ赤に染め上げながら、ベルゼゴレの頬を思い切り引つ張った。

「ああ！ 気持ちいいです、姫様あーっ！」

ベルゼゴレの恍惚とした表情を不思議そうに眺める陽菜。

タツルは無言で陽菜の目を覆い、

「陽菜。あれを世間一般では変態っていうんだ。見ちゃダメだぞ」

「え？ うん、分かりました、陽菜、みませんっ！」

正しい方向に導こうと、努力した。

「……まあ、こういうのも悪くないか。どうせクソ親父も帰ってこないしな」

ぎゃーぎゃー騒ぐスピカとベルゼゴレを前にして、タツルは少しだけ笑みを浮かべる。

陽菜がくすりと笑っているのだ。

こんな騒がしい日常も、まあ悪くはないかもしれぬ。

「……」

何故だが、かつて母親が残した言葉が、タツルの脳裏に浮かんだ。

？ 家族への恩返しばかりしてちゃダメよ？ 恩を返したいと思える、貴方にとっての守るべき恩人を見つけなさい。できるかしらっ？

「できたかもしれないな……母さんはそういう意味で言ったんじゃないかもしれないけど」

スピカを見つめながら、タツルは独りごちた。

少なくともスピカは、家族以外の恩人であり、命をかけて守るべき相手だった。

たとえ守りたい理由が、義と使命感から生まれるもの？だけ？だったとしても。

．．．

2

「というわけだよ、ユマ。アレンの奴の能力は死の星には向いていないからね。君が行くことになったってわけさ」

「……………ん」

ユマ・レイリア・エドルンスは、頭の中に響く特殊な専用通信に対し、短く返答する。彼女が少し不機嫌なのは、アクドレムと呼ばれる洗浄ポッドの中で、その小さな身体を清潔にする作業の最中だったためである。

「まあ、そう怒るなよ。姫には<sup>クラファール</sup>三天元<のベルゼゴレが護衛についているんだ。その姫を連れ戻せるのは、同じく<sup>クラファール</sup>三天元<である君かアレンしかいないんだからさ？ なおかつ、死の星で退化せずに戦えるといったら、もう君しかないんだ」

「……………ん」

ユマは同じように返答する。

洗浄が終わり、ポッドが開いた。ナノ粒子によってユマの身体の汚れは無害なものへ分解。さっぱりとした状態になった彼女は身体を起こし、粒子反射鏡を目の前に展開した。

淡い桃色のショートカットに、澄んだ真紅の瞳。相も変わらず無表情な自分の顔が前方の何も無い空間に映る。ユマは鏡を見ながら少しだけ伸びた右側の髪を真っ白な流体ゴムで束ねると、満足した様子で小さく頷き、展開を解いた。

「いいかい？ まず事実として、キヤスバルは音信不通になった。おそらくは姫側に寝返ったベルゼゴレにやられたのだろう。それだけならまだしも、状況はより最悪なことに　姫は禁忌の力、人体蘇生の力を、こともあるように>原初体<に対して使ってしまったよ。うだ。一国の姫とはいえ、A級協定違反だからね。即刻、我々は彼女を審議にかける必要がある。だから、分かっているとは思いつけど殺してはいけないよ？　あくまで連れてくるだけ。彼女が蘇生した>原初体<も今となつては重要参考人だから、生かしておかなければならない。分かるね？」

「……………ん」

ユマは同じような調子で三度返答する。お気に入りの黒くてタイトなインナースーツに着替え、その上から>完全装鋼<を展開した。『お、転送準備はOKみたいだね。よし、じゃあ、君がやるべきことを言ってみて、ユマ』

「……………姫と、>原初体<を、壊す」

『ぜんぜん違うよ！？　僕の話聞いてた！？　ああ、だから嫌だったんだ、こんな重要任務に子どもを向かわせるなんて！』

「……………ゆま、子どもじゃないもん」

子どもと言われ、むすつと口元をへの字へと変える。実際彼女の身長は百四センチと小柄であり、童顔も相まって子どものような風貌だった。それでもユマは十三歳。彼女の中では、もう立派な大人の仲間なのだった。ただ齢十五に満たないから、予言を信託されていないというだけで、彼女若干十三歳にして例外的に異性と接触を許されている身分である。

そう、彼女は異例の若さで、この国における最強を示す証、>三天元<の称号を授かっている。>完成体<の大人連中が束になつても敵わない、一騎当千の力を持っている。

彼女が大人であることは、彼女の強さと勝利が示してくれる。大人より強ければ、子どもではない。大人に勝利出来れば、子どもではない。



故に最年少>三天元クラファールたるユマの基本哲学は、単純明快だった。

？とりあえず大人はぶっ壊して、圧倒的に勝つ？。

それを繰り返し返してきた彼女にとっては、もはやそれは最上級の快樂でもあった。

『いいかい？ 殺しちゃダメなの！ まあ、ベルゼゴレの方は、いざとなったら殺す気にならないと無理かもしれないけど……』

「……………ベル、壊していい？」

『ああ、うん、そうだね……………ベルゼゴレは殺しても死ななそうだし

いいよ。後で僕が何とかしよう。……………けど！ 姫はダメ、姫は

ダメだからね！ 姫は>不死鳥フェニックスの能力で不死身だけど 君だけは彼女を例外的に殺すことができるんだ。それは本当にマズい』

「……………む。でも、壊さないと……………つまんない」

『楽しいこと他にもいっぱいあるから！ だから、ね？ 壊すのはやめよう、ね？』

ユマの通信相手、王宮政府内勤の男が慌てふためく。

「楽しいことつて……………たとえば、なに」

『えっと、その……………観光とか！ ほら、地球は進化係数マイナス1

8だから、>完成体エリミナはあまり観光に行きたがらないし、レアな星

なんだよ！ そう、観光だよ観光。ユマも大人なんだから、そ

うの経験してみてもいいんじゃない？ 姫は地球の学校に通って

るみたいだから、ユマも潜入して あ、そうだ、スパイ、スパイ

ごっこなんてどうだい？ バレないように姫を拉致するんだよ。ス

パイだから殺しちゃダメ。ねえ、ほら、いろいろ楽しそうだろ？

だからとにかく、殺しちゃダメ！』

「む……………観光……………学校……………スパイ……………むむむ……………」

ユマは量子通信を行い、それらのキーワードに？地球？と？日本

？というワードを追加して脳内検索を開始した。するとそこにはユ

マが知らない世界が十二分に広がっており、非常に魅力的に映った。

スパイ、というのも面白そうである。

「……………分かった。姫は、壊さない」

『分かってくれたか！ よ、良かった……これで僕のクビが飛ばずに済むよ……やれやれ』

王宮政府内勤の男は、安堵を口にした。そしてすぐさま、口調を厳格なものへと変え、

『ユマ・レイリア・エドルンス 貴公に命じる。スピカ・メイリスユトロ・ニルヴェイナ姫殿下を我が国へと連れ戻し、第一級審判審議会へと連行せよ』

「ん」

ユマは小さく、こくりと頷いた。

これより、最年少＜三天元クラファールたる破壊の少女が動き出す。

\*

「なるほど……つまり結局、スピカは遠い星のお姫様で、＜完成体エミナ＜という種族の性質に疑問を抱いてて、＞原初体ファルム＜俺たち地球人が持つ愛情って奴を知りたいわけだ」

「そういうこと。だからタツル、さっさと教えなさい。愛って何？」

まったく、この質問は一体何回目だろうか？

現在時刻は十一時。日曜日の昼間、タツルはスピカと二人でソファに座っていた。陽菜は美里家に遊びに行っており、ベルゼゴレはその護衛に回ると言って陽菜を追いかけ回ったきりだった。本当はタツルがついていくはずだったが、陽菜にシスコンと罵られ、あえなく断念。代わりに私が行きましようなどと微笑むベルゼゴレは正直不安の塊にしか見えなかったが、陽菜を一人で外に出すよりはマシかと思い、タツルは彼に陽菜を任せることにした。

「愛とは………ロマンだよ、スピカくん」

適当な返事をよこすタツル。

タツルは昨日から何度も＜完成体エミナ＜という存在について説明されており、その度にこの質問もされていた。スピカは愛の定義に熱心で、どんなトークをしてても最終的にはここに行き着く。

「ロマンって何」

「ロマンとは、逃避行のことだよ、スピカくん」

「トシヒコって何」

「トシヒコじゃないよ、逃避行だよ、スピカくん。逃避行というのはえーっと……あれだ」

「あれ？」

「ここから逃げよう！ 二人で一緒に暮らそう！ みたいな」

「………？ なんであたしが逃げなきゃいけないの？」

「いや、うん……ごめん俺が悪かった……」

スピカと話していて、気付いたことがあった。

そう、彼女は恋愛に疎い。というか世間に疎い。そもそも異星人であるのだから当然かもしれないが、異星人の中でもとりたて箱入り娘であることがひしひしと伝わった。

前提条件として、彼女は十五歳になるまでベルゼゴレ以外の男性と会話したことがなかったらしい。恋愛経験値はゼロ。まったくの初心。

「……でもさ、スピカが愛を知ってしまったら、退化しちゃってマズいんだろ？ やっぱ愛の勉強とか、そういうのは止めた方が……」

「安心して、退化しないから。基本的に、あたしはベルゼゴレの能力によって守られているからね。言ったでしょう？ >完成体エリミナは  
そのコアに固有の能力を宿すのよ」

「ああ……まあ」

タツルは小さく頷いた。

スピカ曰く、彼女たち>完成体エリミナはコアというものを持つらしい。それは第二の心臓であり、失うとやがて死に到る代物。普段は身体に溶けこんでいて見えないそのコアは、彼女たちがロボットに変身する際のエネルギー元なのだとか。

コアにはそれぞれ特性があり、スピカの場合は人間を生き返らせることが可能、ということらしい。その他にも彼女たちはテレポーターション、発火現象を起こすなど、様々な異能を行使することが

できるそうだと。

> 完全装鋼<sup>アムルファイア</sup>くを含め、すべてはコアの力によって行われる量子演算・物理干渉の結果だ。などとスピカは言ったが、タツルにはいまいち理解が出来ていない。

コアがあれば超能力が使えたりロボになれる、ということだけが何となく分かった。

「あたしは退化せず、愛を知る>完成体<sup>エリミナ</sup>となるの！ だから気にしないでいいわ！」

スピカは偉そうにソファーにふんぞりかえる。タツルは目を細めて頭を掻いた。

「でも俺の命がかかってるんだけど……スピカが退化すると俺ベルゼゴレに殺されるらしいんですけど……」

「既に一度、あたしが助けた命よ？」

「そうですね……」

それを言われては敵わないタツルである。

とはいえ、スピカに退化されてはマズい。というのは、ベルゼゴレから本気で釘を刺されていることでもあった。

退化。すなわち、愛を知ることによる特異現象。

タツルにもよく分かっていないが、要は愛を知らない>完成体<sup>エリミナ</sup>くが愛を知ってしまった場合、自らのコアを感じなくなり、>原初体<sup>ファルム</sup>くと同様の存在になってしまうことがある。ということのようだった。>原初体<sup>ファルム</sup>くとはつまり、タツルのような普通の人間のことである。

スピカがそうなってしまった場合、タツルはベルゼゴレに殺されてしまうらしい。それだけではなく、スピカは母星の同朋に捨てられ、故郷を失うことになるのだと。

そんなことは絶対に避けたい。故にタツルは、あることを決心していた。

？スピカには、愛を教えない？。

建前上はスピカに協力する姿勢だが、実際はその真逆。タツルは

スピカに愛の何たるかを教えるつもりがなかった。愛を知ったスピカが、故郷を追われて愛すべき仲間を失っては元も子もない。そう思ったからである。

「というか、愛の何たるかなんてものはそれ以前にそもそもタツルにも分からないわけで。」

「そうそう、タツル。あたし、恋愛映画のDVD、というものが観たいのだけれど。このテレビという家電製品を使えば観れるらしいじゃない？ ちょっと、あたしに観せなさい」

「もちろん、そんなものはダメに決まっている。愛に関する情報は一切与えてはならない。タツルはにっこりと微笑みつつ、DVDボックスから一枚のディスクを取り出した。」

「OK、これだよ。そうだね、暇だし一緒に観ようか！」

「さすがね、やるじゃない、そうしましろう！」

タツルが手に取ったのは、近くのスイミングスクールで買ったイメージDVDだった。

\*

「分かったわ、タツル！ あたし、分かったわ！」

スイミングの素晴らしさをDVDを通して体感したスピカは、その後デスクに置かれたノートパソコンでスイミングについて検索をかけ、満足のいく結果を得た後、興奮気味に言った。最初は「量子検索が出来れば……まったくダメな星ね」などとぶつぶつ言っていたスピカだったが、今や百点満点の笑顔である。

タツルは何が分かったのか嫌な予感を感じつつも、「それは良かったね！」などと適当かつ投げやりに返事をした。

「愛とはつまり、水なのよ。掴めそうで、掴めない。DVDに出演していた彼女たちスイマーは、水泳という競技を通じて、愛を表現しているのね」

「う、うん、そう、そうなんだよ！」

スピカの哲学的な超解釈に感心しつつ、さらに別の方向へ持つて行けないかと画策する。

「水は形がないからね。まさに、愛そのものなんだよ。ほら、だから俺たち地球人はお風呂に入るのさ。水の中で愛に触れ、愛を知るんだよ」

「……っ！　そ、そうだったのね！？　あたしたち>完成体エリミナは、アクドレムという洗浄ポッドを使って、ナノ分解によって汚れを落とすんだけど……だから、だったのね……？　あたしたちが愛を失ったのは……文明の進歩によって、お風呂を、失ったから……」

がくりと、両手をつけてスピカはうなだれた。長いツイントールの先端がソファーに貼りつく。よく分からないが、スピカに相当の衝撃を与えてしまったようだった。

「タツル。なんでもいいから、お風呂にまつわるあんたのエピソードを聞かせなさい」

「はい？」

「いいから早く！」

「は、はい！」

突然意味不明な話題を振られてタツルは少しだけ困惑しつつも、必死に脳内を搜索。いくつかのエピソードに思い当たった。

「……母さんと一緒に風呂に入ってた頃さ、俺、上手く身体が洗えなくて。だから母さんとよく身体の洗いっこをしてただけど、母さんも俺を洗うの下手でね。よく目にシャンプーやら何やらが入って、俺はわんわん泣くんだけど、そういうとき、母さんは決まってこういうんだ」

「うん、なに？」

「タ？ツル？のおめめも？ツルツル？……ってね」

「え……？」

リビングが、静まり返った。

「いや……母さん、ダジャレが好きだったんだ……」

「ダジャレ？」

「ええと！ 次のエピソードいきます！」

無性に恥ずかしくなったタツルは、次の話を始めることにした。スピカは疑問符を浮かべながらも、こくりと頷いてみせる。

「陽菜がまだちっちゃかったとき、俺、たまに一緒に入ってたあいつと身体の洗いっこをしてたんだけどさ。そこで気付いたんだよ。こいつ……俺にあるものが、ないって。まじまじと見てみたんだけど、本当になくて すっごい驚いたんだ。そしたらなんか陽菜が不思議そうにしてて。だから俺は、自分のソレを見せつけてやったんだ。どうだい、俺の股間にはツチノコがいるんだぞ……ってね。そしてら陽菜が泣いちゃって、でもなんか 嬉しかった」

どこからどうみても変質者の目覚めのようなエピソードを、タツルは満足そうに語る。

「ふーん……そう」

「あれ、つまらなかった……？ ってそうか、スピカは……初心の子だったか……」

スピカにはジャパニーズ・シモネタが通じない、ということをつツルは思い出す。もしもこの話を聞かせた相手が美里だったら、きっと拳が飛んできたに違いない。卑猥な話をしてツツコミがない、というのはなんだか新鮮だった。

「な、誰が初心よ！？ あたし見たもん、あんたの見たもんっ！

あれでしょ、ツチノコってあの……グロい、やつ、でしょ……？」

「グロいかいいうなあ！ 俺が唯一人に誇れる武器なのに！」

タツルは必死に訴えた。

「……で？ 俺のお風呂エピソードがなんだっていうんだよ？」

「うん。そのことなんだけど……真似しようと思って」

「……はい？」

タツルは急に不安に襲われた。なんだか嫌な予感しかしなかった。

……真似？ 真似ってそれ

「つまり、？ 異性と一緒にお風呂に入る？。そして？ 身体を洗いっこする？。それが 水の中で愛を感じる条件なんでしょ？ ちよ、

ちよつと恥ずかしいけど……あ、あたしだって、そんなくらい、できるわよ！」

「ええつ、ちよ、それ何か違つ……というか異性つて……誰と!? まさかベルゼゴレ!？」

「はあ!? なんであたしがベルと!? そうじゃなくて、その、あ、あんたとに、決まつてるでしょ!? だ、だつて、あんたと陽菜は一緒に入つたから 愛情で、結ばれてるんでしょ? ということは、あんたとあたしが一緒に入れば、あたしも愛情を知ることが」

「ちよつと待てえええつ! そ、そもそも、スピカは俺に裸見られて二度も泣いてたじゃないか! そ、そんな、一緒にお風呂でつて、そんな……やばい、やばいつて」

「この国には、三度目の正直つて言葉があるじゃない! だ、大丈夫よ、あ、あたしはやれば出来る子なんだから! そ、それに、その あ、あんたにだったら、見られても……いいつていうか……その」

「……え?」

「ああ、もつ、うるさい! とにかく入るわよ! 今すぐ! 早くお風呂沸かして!」

「今すぐ!？」

「いいからいつてこおーいつ!」

「は、はいー!」

勢いだけで、タツルはお風呂を掃除し、沸かしてしまった。なんといつても、タツルも健全な男の子である。如何に相手が異星人とはいえ、見た目は人間と全く一緒なのだ。

沸かしながら、タツルは思った。

もつこうなつたら こつちだつて覚悟決めてやる!! と。

\*



先に入ってて、などと言われたタツルは、大人しくその命令に従って浴槽に浸かっていた。心臓の鼓動は早まるばかりで、一向に落ち着く気配がなかった。

「OK、落ち着け俺……こういうときは素数を数えるんだ……って、素数って何だっけ」

タツルは顔を湯せんに沈め、ぶくぶくと気泡を立てながらひたすらに待機する。ドア一枚挟んだ脱衣所からは、スピカが着替えている様子がぼんやりとにこったガラス越しに伺えた。

「……お、お待たせ。タ、タツル？ あ、その……向こうを向いててほしいんだけど」

「お、おう」

タツルは浴槽の中でのくると反転、ドアに対して背をみせた。ドアの代わりに、数日前に例の事件によってかち割られた窓が目に入る。ガムテープで補修してあった。

「こ、こつち向いたら……殺すから……」

「う、うん」

か細い声を絞るようにして吐きながら、スピカが浴槽に入る。タツルの背中に彼女のつま先が触れ、思わず変な声が漏れそうになった。タツルはごくりと生唾を飲み込みながら、徐々に息を荒くしていく。なんとというか、辛抱たまらなかった。

「……入ったわ」

「お、おう」

「こ、こつち向いても、いいわ」

「……いいんだな？」

「う、うん」

「……分かった」

正直振り返りたくて仕方なかったタツルは、ついにその強烈な欲求に従って身体を百八十度反転。すると体育座りをした状態の、一糸まとわぬ女子のすべすべの素肌がそこに存在していた。スピカは顔を真っ赤にして俯いている。大事なところは、体育座りのお

かげで見えそうで見えなかったが、これはこれで究極的にそそられるものがあつた。

タオルをまいている、水着を着ている、などといった無粋なことは一切ない。彼女のか細い生足はもじもじと揺れ動き、手の位置を保持して余す彼女は膝辺りを無駄にさすっていた。

「……な、なによ……じ、じろじろ見るんじゃないわよ……すつごく、卒倒しそうなくらい、は、恥ずかしいんだからね……？」

スピカは今にも泣き出しそうな様子だ。とはいえ、前回や前々回の時のように絶叫するようなことはない。今タツルの目の前にいるのは、自分の裸を恥じらう一人の乙女だった。

「……奇麗だ」

「……そ、そうなの？」

真摯な態度で告げる紳士の本音。スピカは余計に顔を真っ赤にしたが、それがまた素晴らしく可愛らしい。タツルのタツルは、徐々に肥大化していった。

「え、ちょ……なんか、あんたのツチノコさん、大きくなってない……？」

違和感に気付いたスピカが、疑問を呟いた。タツルは大きく頷き、故に、人はこれを進化と呼ぶんだ」

などと、尊大な調子で格言めいたことを言つてのけた。

「ふーん……そう」

「き、気になる？」

「べ、別に！ ぜ、全然よ、あたしがなんで、その……グロいの気にしなきゃいけないのよ！ むしろ絶対、ぜーったい、触りたくないもん！」

「別に触れとは言つてな……」

「う、うるさい！ ほら、そんなことより、あんた、あたしの身体洗いなさいよ！」

スピカはフン、とそっぽを向きながら言つた。タツルは唾然としつつ、再びゴクリ。

(いいんですかね!? いいんですよね!?)

「じゃ、じゃあ……そこに、腰かけて」

「……。い、言っておくけど、後ろ向きなんだからね」

「う、うん」

「……うん」

スピカはすー、はー、と深呼吸をしたあと、胸を隠しながら立ち上がり、小さな風呂場用の椅子に腰かけ、タツルに背中を向けた。彼女の目の前にある鏡越しに、タツルがぼんやり映る。

「ちょ、ちよつと、鏡があるせいで……その、み、見えちゃうじゃない」

「だ、大丈夫。ほら、湯気すごいし」

「……そう……そうね……わ、分かったわよ」

実際、湯気がすごかった。鏡はほとんど曇っていて、スピカの大事な部分はやはり見えそうで見えない。タツルはオホンと息を漏らした後、スピカの背後からスポンジを手にとり、ボディソープをかけ、二、三度握って馴染ませた。

「……準備できたぞ」

「タツル。陽菜にやっただみたいに、優しく、愛情を込めるのよ……」

? わ、分かった?」

「わ、分かってるよ」

というより、どうしたってそうなるに違いなかった。タツルは意を決し、浴槽に浸かりながらスポンジを構え 彼女の背中にあててみる。「ひゃう!？」などとスピカはくすぐったが、もう構わない。一気に、縦にスポンジを奔らせた。

「ちょ、ちよつといきなり……ま、まだあたし、いいって言ってないわよ!？」

「ごめん。いい?」

「……うん」

ぼそりと、俯きながら彼女は承諾を口にした。瞬間、タツルの手が動く。

標的は当然のように　連なる二つの丘！

「ま、待って、そ、そういうところから洗うの？」

「そういうところから洗うの！」

「な、なんで、こういうときだけ、男らしいのよう……」

タツルの謎の気迫に圧倒され、スピカは黙り込んだ。チャンスとばかりに、彼女のふつくらとした二つの膨らみ　その下半分を持ち上げるように、スポンジを這わせてみる。

スポンジ越しに、ぷるんとした感覚があった。瞬間、タツルの中の大切な何かが音を立てて崩れ落ちる。

（もう辛抱たまらん！　俺は……俺は……桃色のトンガリを、グリグリしたいッ！）

タツルはスポンジを投げ捨てた。エロに魂を売り、無防備な少女の特に敏感な部分に　触れようとした、その時だった。

「……え？」

パチン、パチンと。どこかで感じたことのある感触が広がる。やがてそれはバチバチと音量を上げ、バチチチッ！　と一気に加速し、加熱。

デジャヴである。まるつきりデジャヴである。つまりこれは、

「う、うあああああああああ！？」

> 完成体エリミナくが、地球にやってくる時の　音。

「ふあ！？」

突然背中に冷たいものが触れたためか、スピカが変な声を上げる。その冷たいもの　紫色を基調とした、龍を模したようなロボットが、タツルとスピカの間に割って入るようにして現れたのだった。

「……………む。これは、なにごと？」

紫色のロボットが、状況を呑み込めない様子で呟く。こっちが聞きたいタツルだった。

「ちよつと一体何　つて、その機体、> 紫電龍王ケラビレイくじゃない！？」

あ、あんた　ユマね！？　ま、まさかタツルを殺しに！？」

振り向いた矢先、スピカが動揺する。しかしそのロボ　> 紫電ケラビレイ





月曜日の朝。美里の隣に相席中のタツルは、バスに揺られながら彼女に武勇伝を聞かせていた。テーマは「謎の少女登場、タツル逮捕」。今回も美里は完全に話半分である。

「ところで、タツル。さつきから気になってただけどよ……お前から、いつからそんな仲良くなったんだ……？」

「……なんのことかね？」

美里の質問に対し、必死に惚けてみせる。実のところ、タツルは先ほどから後部座席に座る某スピカさんに頭のとっぺんをぐりぐりといじられていた。

出来る限り学校では他人のフリがしたいと考えるタツルは、ここまで必死に気にしないフリをしてきたが、それもそろそろ限界に近い。このままではグリグリされすぎてハゲる。

ふう、とため息を吐きながら、タツルは諦めた。

「……さつきから何用だ、スピカ」

「タツル。つまんない。なんか面白い話して」

「朝から無茶ぶり!？」

予想外のストレートかつシンプルな切り込みを受けて思わず狼狽する。そんな様子を目を細くして眺める美里は、なんだか不機嫌そうだった。

「やっぱ仲良しじゃねえか。いつからだよ？」

「……ここ数日だよ。週末にいろいろあってね……」

「ちなみに私も仲良しですよ!」

タツルの斜め後ろの席で大人しくしていたベルゼゴレが、急に立ち上がって友情アピールを始めた。その手には何故かカップラーメン。ぎよっとしている美里の耳元で、タツルは小さく「関わったら負けだ」と囁いた。

「というか、聞きたいのはこっちなんだけど？ あんた、確か美里っていうのよね。タツルとどういう関係なのよ？」

何故か喧嘩腰のスピカが、タツルの背後より美里を鋭く睨む。すると喧嘩っばい美里は、これに対してさらに倍の睨みで応戦した。

「し、ん、ゆ、う。私とタツルは出会って一年、堅い友情で結ばれてんだよ。そっちこそなんなんだ？ 私とタツルが喋っているのに、後ろからちよっかい出してきやがって」

「あたしはこいつの主人よ。つまりこいつはあたしの所有物。だからあたしの好きにしているの。当たり前でしょ？ っていうか何、親友？ 友情？ なにそれ、おいしいの？」

「おいしいわけないだろ。っていうか何だよ、所有物？ おいおい、頭わいてんじゃねーの。実際お前はタツルの？ 顔見知り？ ってレベルだろ。出会って一週間経ってないじゃねえか。私はお前とは年季が違っただよ。お前が知らないような、いろんなタツルを知ってるからな」

「へえ？ 言つとくけど、あたしはあんたが見たこともないすごいものまで見たわよ」

「ああ？ 何だよ、言ってみるよ」

美里とスピカの顔がどんどん近付いていく。二人は立ち上がり、最終的にはおでこをぶつけあった。バスに揺られる他の生徒たちが完全に引いている。

間に挟まれたタツルは、とりあえず何も起きずに早く学校に到着しろ、と祈るばかりだ。

しかしその願望は、スピカの一言であえなくクラッシュする。

「あたしはね、タツルのツチノコさんをまじまじと見たんだから！ それだけじゃないわ、昨日はタツルに身体を洗ってもらったのよ！」

「ぶっ」

タツルは思いきりむせ返った。

「な……お、おい！ タツル、本当か！？」

「一、三、五、六……」

「おいタツル、素数数えてんじゃねえぞ！ しかも六は早速素数じゃねえ！」

美里に胸元を思いきり掴まれたタツルは、思わず「ギブ、ギブ」



と声を絞り出す。

(くそ……こうなったら……『ガチでツチノコさんでした』作戦だッ！)

不意にタツルは、真顔で諭すようにして、美里の肩を掴む。

「いいか、美里。スピカが見たのは……ガチでツチノコさんだったんだ。今まで黙ってたけど……俺、実は股間にツチノコを飼ってるんだよ。警察に説明していた『股間からツチノコ説』は事実だったんだよ……！」

「……意味が分からねえが。まあいいや……エサとかはどうしてんだ？」

「それは、お前、ツチノコといえば……もちろん……その……えっと……笹……？」

「パンダの主食じゃねえか！……おまつ、マジでこの転校生に……見せたんだな……？」

「えっと、その、ハイ、ちんちん見せました！」

もうこれ以上ごまかしきれない　そう判断したタツルは一気に掌を返し、ノリで乗り切る方針に切り替えた。

「……感想は？」

「最高でした！」

「……そう」

絶対ぶん殴られる、と覚悟をしたタツルは思わず目を瞑ったが、しかし拳は飛んでこない。疑問符を浮かべながらおそるおそる目を開けると、タツルの顔をじいっと覗き込んでくる美里の姿があった。彼女は何故か唇をへの字に結び、「むうう」などと悶えている。

「ふん、分かったかしら？　あんたの一年より、あたしの一週間の方が濃厚なのよ！　タツルのツチノコさんを拝んでから出直すといわ！」

そんな美里にスピカが止めを刺した。何故だか美里は反論せずにつくりと項垂れ、何かをぶつぶつと呟いている。

「私も……でやる」

「あの……美里さん？」

「私も拜んでやるつつつたんだ！ さあ、タツル、パンツ脱げ！」  
「なんでそうなるのーっ!？」

タツルは必死で抵抗を試みたが、美里の強引な切り裂き攻撃に為す術はなかった。

気がつけばタツルはバスの中、制服のズボンとパンツを真つ二つに引き裂かれ え、これ誰得？ と誰もが思わずにはいられない、強制ストリップ劇場の主役となっていた。

少女たちの悲鳴が聞こえる。バスの運転手が「緊急事態！ 至急応援を頼む！」などと叫んでいるのが聞こえる。自由なベルゼゴレがバスの中でカップラーメンをすすっている音が聞こえる。タツルのグロテスクなツチノコを直視した美里が泣きだす音が聞こえる。バスを降りた瞬間、手錠をかけられながらタツルは思った。

どうしてこうなった。

\*

「おはようございます……」

再び釈放されたタツルは、やつれながら教室のドアを開ける。クラスメイトたちの悲鳴を無我の境地にて黙殺しながら、自らの席に着いた。

丁度お昼休みが終わる頃だったらしく、ぱらぱらと人が増えていく。美里やサタケ、スピカやベルゼゴレも、自分の席についていた。

「ふふ、災難だったわね、タツル」

スピカが隣の席から、にやにやおちよくるような視線を投げってくる。

「私は正直引きました。ああいう変態的行為は止めた方がいいのでは？」

ベルゼゴレが、まるでゴミ虫を見るような視線を送ってくる。

「……私は悪くない。なんかもう何もかもお前が悪い……というか、憎い……変なグロいもん見せやがって……」

遠くの席で、美里がなにやらぶつぶつと呟いている。

「タツルよ……スピカさんとミサさんにイチモツ見せつけたってマジか……マジなら殺す」

前の方の席からタツルに向けて呪いを呟くのはサタケだった。

「……………どんまい」

そして最後に、桃色の髪の少女が真紅の瞳で見つめながら、右隣でグツと親指を立てた。

「はあ、本当だよ。ドンマイすぎる……………って、待てええええい

！！」

ビシツと右隣にツツコミを入れた。

極自然に右隣に座ってらっしやるそのショートカットヘアの口リ少女は、どうみても昨日のお風呂の人だった。ナチュラルに教室に溶け込む彼女は、普通に制服を着ている。

「あー、そうか、あんた知らないのね。ユマよ、ユマ。あたしの知り合いで、>完成体<の中でも最強と謳われる>三天元<の一人。癪だけど、あたしやベルゼゴレよりさらに強いから、下手に挑発しないことをオススメするわ」

「……………ゆまじゃない。008。……………よろ」

ユマと形容された少女は、再びグツと親指を立てる。タツルは頭を抱えた。そもそも昨日まで右隣に座っていた菅原くんも強制お引越しのだろうか　と思うと気が気ではなかった。

「えっと、ユマって言ったか……？　お前は何をしにこの星に？」

「008だけど……………ん。……………観光。あと、スパイ。でも、いまは、おべんきよ」

「ああ、そう……………。勉強ね」

「そ……………ゆま、大人のおべんきよ、してるの」

「大人？」

「……………これ」

そう言つて、ユマは文庫本サイズのカバーがかかった本をタツルに手渡した。小難しい本だろうか？ と予想しつつ、タツルがペラペラページを捲ると

（なになに？ 「ああつ、ダメ……」 幸子は恍惚とした表情で不規則な吐息を繰り返す。彼女は獣のように四つん這いになり、後ろから っつて、オイイイイ！）

「官能小説じゃないか！」

「ん。ゆま、大人だから。モッコリンの、ツチノコ、見てもへーきだった。ゆま、大人」

エツヘンと無表情に、ない胸を張るユマの姿は見ていて微笑ましい。

しかし、タツルは断じてモッコリンなどという名前ではない。

「いいかいユマちゃん。俺はモッコリンじゃなくて子守山ね？」

「え？ ……………でも、あだ名、モッコリンだって、聞いた」

「誰に！」

「……………ベル」

ユマはベルゼゴレを指差した。ベルゼゴレは憎たらしい程にどや顔だった。

「あんにやろつ……………」

タツルは必死に拳を握り、密かに報復を誓った。

「分かった？ ユマはそんなやつよ。今のところ無害みただから放っておいていいわ」

ぶつきらぼうにそう語るスピカは、なんだか眠そうである。彼女は小さく一つ欠伸をすると、「おやすみ」と言つて机に伏してしまつた。

その眠りにつくまでの早さに驚くタツルだったが、くいくい、と、ユマに袖を引っ張られて我に返り、彼女の方に向き直した。

「なんだよ今度は」

「ここの意味、分からない。……………教えて」

「仕方ないなあ……………」

ユマが指差す箇所をタツルは音読した。

「勃起　これはつまり、股間のツチノコさんが大きくなることだよ。ツチノコさんは大きくなることで、相手を妊娠させるほどのパワーを手に入れるんだ」

「そう……じゃあ、これ。これは、どういう意味？」

「肉の棒で貫く　ああ、これはね、ツチノコさんを相手にぶつけて貫通させることで、相手の鎧をはがすんだ。鎧をはがされた相手はね、もうあと一押しで妊娠しちゃうんだよ」

「そう……じゃあ、これは？」

「白濁を飛ばす　これはかなり際どいね。うん、実は巨大化したツチノコさんはね、白い弾丸を放つことが出来るんだよ。その弾丸をモロに食らった相手は妊娠しちゃうんだ。まあ、鎧をはがした上で、の話になるけどね」

「つまり……巨大化したツチノコに貫かれた後、その弾丸を喰らったら、妊娠するの？」

「そうなるね」

我ながらなんとまあソフトな言い回しである　と、タツルは満足気な表情を浮かべた。

「妊娠したら、どうなるの？」

「んー、ざっくりいうと、妊娠させてきた相手と一生一緒に暮らさなきゃいけないね。多分結婚することになるかな」

「……それって、よくない、こと？」

「うんにゃ、子どもが出来て愛情いっぱいさ。きっと幸せになる。妊娠こそが人生の目標、っていう人も結構いるよ。けど相手は選んだほうがいい。一生一緒にいるわけだからさ」

「そう……妊娠したら……結婚して、幸せ……うん、ゆま、分かった」

ユマはうつすらと笑みを浮かべた。

「……結婚相手が、モッコリン、みたいな人だったら、いいな」

「はあ？　なんでだよ？」

「ゆまを、バカにしないで、ちゃんと……教えてくれる、から」  
「そ、そうか……」

実は全然ちゃんと教えていないタツルだった。

……と、そこで余計な男が後ろからちゃちゃを入れてくる。

「ユマさん。その男と結婚すると、性奴隷のように扱われますよ？」

「……………性奴隷？」

ベルゼゴレの発言に興味を持ったユマが聞き返す。

「奴隷というのは、相手の命令に絶対に従うという義務を負った者のことです。性奴隷というのは、性についての奴隷。つまり、その男が考えるありとあらゆるエッチな望みを何でも叶えてあげなきゃいけないってことです。……………どうですか？」

「……………なんか……イヤ……近付きたくない……………」

「あれ！？　なんか一瞬で嫌われた!？」

本気で嫌そうな顔で見つめながら、ユマはタツルの方角から机を遠ざけた。彼女はこともあろうに、事実無根のタツル鬼畜説を鵜呑みにしてしまったようである。

「さあ、授業を始めるぞー」

国語教師による授業が始まった。タツルに話しかけることを一切止めたユマを横目で見ながら、タツルは一人頭を抱えるのだった。

そもそもクラス二十五人のうち、三人が宇宙人って、これ、  
どうなの？

\*

「……………そろそろ目的を話してくださいませんか、ユマさん」

「……………」  
放課後の屋上。

風に吹かれながら、ベルゼゴレは迫るようにしてユマに向けて言った。

ここまでベルゼゴレに手を引かれて連れてこられたユマは、無表

情で首を捻ってみせる。

屋上には、ユマとベルゼゴレの二人しか存在しない。

互いに>三天元<の称号を持つ者　一瞬触発の状況だった。

「あの>完成体<のように、貴女も陛下の勅命で>原初体<を殺してきたのですか？」

「……………ちがつ」

ユマはベルゼゴレの問いに対し、首を振って答えた。事実、ユマはそんなことを命じられてはいない。姫と>原初体<を殺さず連れ去ること　それが彼女に任された任務だった。

「……………なるほど、予言の破壊が目的でないとすれば……………姫が>原初体<を蘇生したからですね？　貴女たちは姫の罪を審議にかけるつもりです。違いますか？」

「……………」

「しかしここは死の星。私が姫側についた今、派遣されるのは貴女しか有り得ない　そう、>空装猛葬<の力を持つ、貴女しか……………」

完全に凶星である。びっくりと反応しながらも、しかしユマは無表情に見つめ返すのみ。

早速ベルゼゴレに目的がバレってしまった。　と、なれば。

「……………壊されたくなければ、ゆまの邪魔、しないで」

ユマは懐柔の一手に出た。経験則で知っているのだ。自分のことが一番可愛い>完成体<は、力をチラつかせれば一瞬で屈する。

「なるほど……………確かに、私はユマさんに勝てない。しかし私に喧嘩を売れば、貴女とてただでは済みませんよ？」

「それでも、ゆまが勝つことは、戦う前から確定している。……………ベル、陛下に逆らった罪、ゆまなら、軽くしてあげられる。邪魔しないで、むしろゆまに協力した方が……………無難」

「まあ、無難でしょうね……………」

ベルゼゴレは髪をかきあげなら「まいりましたねえ」などと笑顔で呟いている。

「……一つ聞かせてください、ユマさん。どうして貴女はさつさと実力行使で姫を連れていかないのですか？ 学校に転校してくるなんて 貴女は何を考えているのです？」

「……楽しいって、聞いたから。楽しいことないと、ゆま、姫を、壊しちゃいそうだから」

「なるほど……納得しました」

ベルゼゴレはゆっくり吟味するように頷いてから、ユマを見つめた。

「楽しい学校生活に飽きたら、隙について姫様を拉致 ってどこですかね」

「……そんなところ」

「分かりました。ならば私は、ユマさんにとっての？楽しい学校生活？が続くように協力しますよ。貴女の目的は誰にも話しませんし、貴女が姫様を拉致するときがきても、私は邪魔をしません。 どうせ、敵かないませんからね。それに姫様が殺されるわけでもない。ただ連行されるだけなら、私が命を張る理由にはなりませんから」

「……ん。物分かり、いい」

ユマは少しだけ微笑んでみせた。邪魔をしないどころか、楽しい学園生活までサポートしてくれるというのは、ユマにとってはラッキーな申し出である。

「差しあたっては、私が組織する『SCMT』という部活に入りませんか？ 絶対楽しいですよ。学園生活を味わうなら、部活は絶対やった方がいいです」

「……部活？」

ユマは部活、で検索を試みる。しかしここ地球では、量子検索が使えないということに気付く。調べる術を失ったユマには、部活という言葉の意味するところが分からない。

故に、逆に興味をそそられた。

「……ん。分かった、入ってみる」



「うおおおお！ クーデレ転校生が加入！？ 最高じゃないっすか、部長！」

ベルゼゴレに部室へと連れてこられたユマを待っていたのは、歓喜の絶叫だった。

中には十数人の男がいて、それぞれ何故かサングラスをかけている。

スパイっばい。

ユマは自分の心臓が高鳴るのを感じた。未だに部活の意味は分かっていないが、非常に面白そうである。と、期待に胸が膨らんだ。「皆さん、彼女が新しい同士 ユマさんです。仲良くしてあげてくださいね」

「うおおおおお！」

ベルゼゴレがユマを紹介すると、男たちは立ち上がって小ジャンプを繰り返した。貧乳万歳、などと、かなり無礼なことを叫んでいる。

そのうちの一人が駆け寄ってきて、ユマに握手を求めてきた。

「僕は里中健！ サタケって呼ばれています！ ……あの、好きです！」

サタケを名乗る眼鏡の少年が、ユマの両手を手にとって、ぶんぶんと振り回す。彼だけはサングラスではなかった。

「サタケ、てめえはすっこんでるハゲ！」

「ガチャルンツ！？」

そして突然、回し蹴りで吹っ飛ばされるサタケの後ろから現れたのは、金の髪を靡かせる、なんだか悪そうな少女だった。こちらはハードボイルドなサングラスが、いかにもといった感じで似合っていた。彼女は、ユマがこの星のこの国にやって来る前に少しでも強化した、チンピラ、ヤクザといった単語にぴったりの風貌だった。

「サタケくんに、美里さんです。二人とも、モッコリンくんのお友

達なんですよ」

ベルゼゴレがそう言って二人を紹介すると、当の二人はむっとした表情をみせた。

「あんなモテ男なんか、もう友達じゃないやい！」

「あんな奴私が葬ってやる！」

怒りに震える二名をどうどうと落ち着かせて、ベルゼゴレはユマの方を見た。

「まあ、ともあれ、ようこそユマさん。『最近調子に乗ってるモツコリ山を潰す会』 略して『SCMT』に。歓迎しますよ」

ベルゼゴレのくっつくたくなさそうな笑顔を、ユマは少しだけ恐怖に感じた。

しかしまあ、楽しそうなのでよしとするユマだった。

\*

「疲れた……」

家に帰り、タツルは一人ベッドに倒れ込む。

思い出すだけで、どっと疲労が溜まっていくのだった。

「まったくスピカのやつめ……」

授業中にスピカが目を覚ました時、タツルがユマとキャツキヤウフフ状態だったことがそもそものことの発端だった。（実際は全然キャツキヤウフフではなかったが）。

怒りに燃えるスピカは、ことあるうちに教室の真ん中で、「あたしという女がいながら、なんであなたはそうなのよ!? あたしじや満足出来ないってどういうの!?’’などと叫び散らしたのだ。そしてどういう流れだったかはもはや覚えてないが、最終的にスピカは「あたしと一緒に住んでるクセに!!’’などと、カミングアウトまでしてしまう始末だった。

朝のカミングアウト（タツルに身体を洗ってもらった事件）を含めて、その瞬間よりタツルは多数の男たちに本気で殺気を向けられ

ることになる。

バスの中での露出事件もタツルの悪評に拍車をかけており、目を合わせてくれる女子はほとんどいなくなってしまっていた。

サタケは「お前とは絶交だよ！」などと言いながら涙目で走り去り、美里は「私がお前とあの女の間を裂いてやる」などと凄まじい形相で去っていた。

かくしてタツルは孤立無援。殺意と嫌味を一心に背負いながら、ぎゃーぎゃー騒ぐスピカの相手をし続けなければならなかったわけ。

「明日から学校いきたくねえええ！」

じたばたとベッドの上で暴れる。しかし現実はそのようなことでは揺れ動かない。

「……仕方ない、エロDVDでも観るか……」

タツルは重い腰を動かして、エロの準備に取り掛かることにした。幸い陽菜はスピカとともに台所で料理の最中。今なら誰にも邪魔はされない。

「はあ……はあ……やっぱりミカンちゃんは最高だなあ……」

妹もののDVDを観ながら、タツルは興奮を口にする。人として、兄としてどうかと自分でも思いながら、しかし彼の興奮は止まらない。

が、次の瞬間。

「にー、陽菜、指切っちゃいましたです……ばんそーこー、持ってな……いで……すか？」

「うっ、ミカンちゃん、ミカンちゃん……！！ ミカ……えっ」  
時が、停止した。

「いやあああああああ！」

「これは違う陽菜これは違うんだはるううん！？」

こうして、タツルは実の妹まで敵に回すハメになった。

\*

翌朝、学校へ登校したタツルを待ち受けていたのは、なんというか、非常に分かりやすいいじめだった。机の上には「うんこタツル死ね」と油性ペンで書かれており、椅子は持ち去られており、机の中には大量の**にぼし**が敷き詰められていた。

タツルが真つ先にサタケを睨むと、サタケはヒップホップを口ずさみながらこれをガン無視。既に戦争が始まっていることを、タツルはこのときようやく悟った。

「な、なにこれ、タツル!? どうしたの!？」

あらゆる人種に無視されるタツルに対し、唯一声をかけてくれるのはスピカだった。エメラルドグリーンのツインテールがあまりにも眩しくて、思わずタツルは涙した。

「うわあああん、スピカアアアん！」

いじめの悲しさのあまり、彼女に抱きつこうとするタツル。瞬間、ぶすりと首に何か刺さるのが分かった。

「痛え!？」

「ふん……」

なにやら吹き矢的なもので遠距離からタツルを攻撃したのは美里である。タツルが振り返ると、彼女はサツと武器をしまつて知らん顔を決め込んだ。

(そうか……なるほど、サタケも美里も完全に俺を敵に回したようだなあ……ククク)

タツルは引きつった笑みを浮かべる。特にサタケなんぞには舐められたくなかった。

「タツル、椅子がないなら、あたしを使う? ほら、半分ずつ座れば二人座れるわ」

椅子がないタツルを不憫に思ったのか、スピカが手を差し伸べる。命の恩人に更なる恩を重ねられ、タツルは本当に泣きそうになる。

今この瞬間に>原初体ファルム<と>完成体エリミナ<の戦争が勃発したら、タツルはむしろ>完成体エリミナ<側につくかもしれない とさえ思った。

「ダメですよ、姫様。この男のキモさが移ってしまいます」

「姫……………止めた方がいい。性奴隷に、される」

スピカの行動を諭すようにして咎めるベルゼゴレとユマ。

タツルは自らの考えを訂正した。やはり>完成体エリミナも敵である。

まず少なくともベルゼゴレはどう転んでも味方ではなかった。

「大丈夫よ。あたしはまったく気にしないわ。さあ、タツル、あたしの椅子に」

「ユマさん。お願いします！」

「……………ん」

スピカが立ち上がり、席を半分譲ろうとすると同時に、ユマがその能力を発動させる。

「>完全装鋼アムルテイア<展開……………>空装猛葬エアドリアル<、発動」

刹那、ユマの肉体は紫を基調とした装甲に覆われ、変質する。それはタツルが風呂場を見た、彼女の？戦闘モード？だった。

そしてそれだけではない。ユマが>紫電龍王グラビレイに変化した瞬間、タツルの衣服が何故か爽快に弾け飛んでしまった。スパアアン！

と、いい音を放ちながら。

「……………え？」

急に全裸になったタツルは二、三度目をパチクリさせてみる。しかし完全に全裸だった。

家の外、バスの中ときて、次はまさかの教室である。なんだか着実に、変態としての行動範囲を広げていることをタツルは実感する。

だから、どうしてこうなった。

「ふ、ふええええええええええ！」

不意にタツルのぞうさんを見る羽目になったスピカが、意図せず騒音を放つ。既に何度も見たじゃないか！ とつつこみたかったタツルだが、それは叶わなかった。

「もう、いやあああつ！」

「力、カイザアアツ！」

いきなり>鳳凰神紅プロミネスへと転身したスピカが教室内にて特大の火

炎弾を発射。為す術もない変態は、身体にどでかい風穴を空けられ、木端の如く粉碎された。

「つて……これは、洒落に……ならん……」

恩人に殺されるなら、本望？

消えゆく意識の中、タツルは一瞬そんなことを思う。しかし、すぐに頭の中は妹のことですっきりぱいになった。こんなところで、こんな死に方は認められない。

「ぬあああああつ！」

次の瞬間タツルは、受けた傷を一瞬にして？再生してみせた？。

「……え？」

しんとする教室。その次に、一気にざわめきが広がった。

妙なロボットに変形した転校生。スピカが放った火炎弾。それによつて風穴を空けられた全裸の変態。そして 変態の、肉体の、再生。

しかし、ベルゼゴレが右手を翳すと、すぐに教室は静かになった。そんな中、ホームルーム前の教室で、タツルは一人漠然としていた。

(なんで俺……ピンピンしてんだ……?)

ベルゼゴレがそんなタツルを興味深く見つめる。

「こ、これはまさか >不死鳥フエムリルの効果ですか？ しかし >完成エリ体ミチくを蘇生しても対象は不死になり得ないはずでは …… >原初ルム体ムは違つとでも……？」

彼は自問自答を繰り返す。驚いていたのは、スピカも同様だった。「……違う。陽菜は昨日、料理中に指を切つたけど その傷は再生しなかった。？タツルだからこそ再生したのよ？。でも……一体、どういうことなの？」

「なるほど。 >定めラ《ヴァ》リヒ人ムく、だからですかね。 ……これは面白い。彼はもはや普通の >原初ファルム体ムではない あるいは、本当に >完成エリミナ体ムに進化してしまうかもしれない」

ベルゼゴレは面白そうに微笑んだ。しかしタツルにとってそんな

ことはどうでもいい。

「おい！ 俺の身体、どうなっちまったんだよ！？」

叫ぶタツルに向かって、ベルゼゴレはやりわり包み込むように、  
こう言った。

「多分君は不老不死になったんですよ、モツコリ山くん。 姫様  
と、同じようにね」

\*

昼休み、屋上。ユマは一人、水槽タンクに背中を預けながらぼそ  
ぼそと何かを呟く。

「 以上、定期報告、おしまい」

それは定期報告だった。ふう、と一息吐きながら、ユマは自らの  
右手の甲に乗るスズメに向かって報告の終了を宣言する。このスズ  
メは、母星との連絡ツールたる機械仕掛けのロボットであり、一定  
期間ごとに飛んでくる。

陛下の命令を伝えるために、王宮政府の連絡役の男が用意したも  
のだった。

『……信じられない。>原初体ファルムくの分際で、姫様以外の不老不死だ  
つて……？』

「……ん。ゆまも、びっくり。……どうする？ 不老不死でも、ゆ  
まなら、壊せるけど」

『いや、ダメだよ！ 貴重なサンプルだ。重要参考人としてだけで  
はなく、実験材料としてぜひ持ち帰ってくれ。 出来れば今すぐ  
に。陛下は不老不死に関しては熱心だからな』

「……でも、まだ、遊び足りない」

ユマは不満そうに呟いた。せつかく？ タツルをいじめる？ という  
趣旨の楽しい部活に入ったばかりである。スピカとタツルを母星に  
連れ去るということは、すなわちユマのここでの生活が終了する  
ということを意味する。しかしユマは、まだまだここで学園生活を謳

歌したかった。

『……しまった、作戦が裏目に出たか……よし、ならユマ。もしも連れ去ることができたら、宇宙に五個しかない？超特別・秘密の大人セツト？をあげよう。……これでどう？』

「……っ！」

ユマの気持ちが一気に傾く。

『今日中に連れ帰ることが出来たらあげてもいいなあー。出来るかなー。超レアだから、早くしないと他の誰かにとられちゃうかもな』

「」

「……やる。今からやる。ゆま、大人セツト、ほしいもん」

比べるまでもなかった。ユマは視線を強め、屋上のフェンスに駆け寄った。

ターゲットは二名の不老不死。無理矢理にでも連れ帰る。そう

決めた。

『くれぐれも、壊さないようにするんだよ。いいね？』

「……ん」

グラビレイ

壊し屋は>紫電龍王<へと変貌し、フェンスよりターゲットたちを見下ろす。SCMTの面々が校庭を駆け回り、泥玉を投げ付けてタツルを迫害している様子が伺えた。スピカはそんな様子を見ながら、なにやら「男らしく反撃しなさい！あんたは不老不死なのよ！」などと叫んでいるようだった。

ちよつと混ざりたい。

その楽しいげな様子に心を奪われながらも、首をぶんぶんと振って自らを律する。

「……ゆまは、大人になりたい」

クラファール

グラビレイ

>三天元<最強と謳われる>紫電龍王<が、フェンスを乗り越えて屋上より落下。校庭に、着地した。>紫電龍王<は立ち上がり、両の腕を砲身へと変化させ、それぞれ二人のターゲットに狙いを絞る。

すなわち 遠距離攻撃。



「……………壊れない程度に、壊してあげる」  
真紅の光線が、二人の不老不死を狙い撃つようにして、発射された。

\*

「……………っ!? スピカ、危ない!」  
渾身の力でタツルは地面を蹴り、身を呈してスピカを押し倒すようにしてかばった。

真紅の光線をすれすれでかわし、九死に一生を得る。

「な、ちよ、ちよっと、あんた、は、離れなさいよっ!」

「あだっ!?!」

スピカに思いきり蹴りあげられ、タツルは思わず尻もちを着く。

しかし、そんなことに痛がっている場合ではない。たった今攻撃をしてきた相手の方角に、目をやった。

すると、そこには。

「ユマ……………!?!」

紫の装甲を纏った>紫電龍王<が、二丁の砲身をタツルとスピカに向けていたのだった。

「な、なんだ……………!?!」

「え、口ボ……………!?!」

タツルを取り巻くクラスメイト（いじめっこ）たちが口々に驚嘆を吐く。

「や、やばい、よくわかんないけど逃げろおーっ!」

散開するクラスメイトたち。相も変わらず>紫電龍王<よりタツルに向けられる砲身。

逃げた方がいい タツルの脳裏に、警告が鳴り響いた。

「……………次は、?必ず当てる?」

「えっ、ユマ!?!」

スピカがようやく>紫電龍王<の存在に気付いた矢先、狙い澄ま

された二撃目が放たれる。圧縮されたエネルギーは閃光となり、今度は逃げることにすままならかった。

(やばい……!!)

タツルはスピカ 恩人を守るようにして仁王立ちをする。

自らの不死身の肉体に、賭けることにした。

が、何も起こらない。

「バカですな君は……!! 彼女には不死を無効化する力があるんですよ！」

ベルゼゴレの>完全装鋼アムルティア。蒼の機体が、超高速にて真紅の光線を打ち破った。スピカを守るべく壁となったタツルを、彼がさらに守ったのだ。

「……………ベル。どうして、邪魔、するの？」

不服そうな>紫電龍王ケラビレイ。対して蒼穹は、青く発光するレイピアを構えながら笑った。

「さあ、どうしてでしょうね？」

「……………ゆまには、絶対に勝てない。ベルの罪、重くなるだけ。」

……………無駄、なのに

「ふふつ、本当にそうですね。ですが、みすみすこの二人をお渡しするわけにはいかないですよ。姫様は、帰りたくないはずなのでね」

「……………」

沈黙の>紫電龍王ケラビレイ。彼女は小さく「……………そう」と呟くと、砲身をベルゼゴレへと向けた。

「ああ、そう、そういうこと？ ユマ、あんたやっぱ、あたしをあいつの命令で連れ去りにきたってわけね！？ そうはさせるもんですか！ 返り討ちにしてやるわっ！」

スピカが真紅の機体へと変貌を遂げる。灼熱の>鳳凰神紅プロミネンスが、その姿を露にした。

いまや校庭には普通の人間は誰もいない。不老不死と、ロボしかいなかった。

(まったく、なんなんだよこの状況は！)

タツルは何が起きてもいいように、姿勢を低くして構える。

本格的な宇宙人の戦争が、ここに始まるうとしていた。

「いきますよッ！」

最初に動いたのは蒼穹の機体、ベルゼゴレである。人智を超えたその初速度は、タツルでは視界に捉えることも出来ない。が、>紫電龍王ラレレイくはそれを見切り、大砲のような形をした右腕でベルゼゴレの剣撃を弾き、受け流した。

「？絶対反応？……ベルは、誰よりも速い。けど　速いだけでは、ゆまには勝てない」

>紫電龍王グララレイくは右腕をサーベル質状に変化させ、ムチのようにしならせて一閃。

「？絶対命中？」

「くっ！？」

蒼穹は右腕の装甲ごとレイピアを破壊され、生身の右腕が剥き出しになった。

「おしまい　？一撃必殺？」

「があっ！？」

>紫電龍王グララレイくの左の砲身が巨大化し、そこから雷撃が放たれた。ゼロ距離にてその攻撃を一身に浴びた蒼穹は、一撃で装甲を粉碎される。

焼け焦げた制服姿となったベルゼゴレは、そのまま為す術もなく地に伏せた。

「くっ、はあ……やれ、やれ……この強さは、計算外、ですね……」

「ベル！？　ユマ……あなた、よくもベルをッ！」

倒れて血を吐くベルゼゴレの様子を見たスピカが怒りに染まる。

刹那、彼女は大地を蹴って>紫電龍王グララレイくに急接近、刀状の武器に火焰を纏わせ、水平に薙いだ。

「　？完全防御？」

「くっ!?!」

しかし容易に弾かれる。 > 紫電龍王<の圧倒的な強さの前に、 >  
鳳凰神紅<は何も出来ない。

「……お、おい、なんであいつ、あんな強いんだ!?!」

「>三天元<だからよ……中でもユマは、?空想を現実に再現する?  
?つていう、有り得ないくらい卑怯な能力を持つてんのよ!」

> 鳳凰神紅<が吠えた。 なるほど、それはチートすぎる。

「……そう。だから、ゆまはこの死の星でも、ベルに頼らず、退化  
しないでいられる。……ゆまは神様。ゆまが想像した勝利は、絶対  
にもたらされる」

> 紫電龍王<がサーベルをしながらせて奔らせる。 > 鳳凰神紅<は  
飛んでそれをかわそうとするが、からみとられて空中で捕まってし  
まった。

「ユマ……あ、あんた……いい加減にしなさいよ……!!」

「……ん。分かった、じゃあ、遊ぶのおしまい。姫を連れて帰る」

> 紫電龍王<は飛び上がり、動けない > 鳳凰神紅<を抱えて着地  
した。

助けて 命の恩人がそう呟くのを、タツルは聞いた気がした。

「……待てよ。俺の恩人をどこへ連れていくつもりだ」

地に伏すベルゼゴレに、囚われのスピカ。タツルは意を決して喧  
嘩を売る。

嫌がる恩人を、そのままみすみす連れていかれるわけにはいかな  
かった。

「………母星」

「連れ帰ってどうするつもりだよ!」

「……… 姫は、モッコリンを蘇生した。それは、A級協定違反。  
だから審議にかける」

「な……っ! お、おい、なんだよそれ! 審議つて……スピカは  
どうなる!?!」

「……ゆまには、分からない。けれど、A級は重罪。最悪、殺され

る

「……ああ、そうかよ！」

タツルの中で、何かが弾けた。

(スピカが重罪？ 俺と陽菜を生き返らせたから 殺される？

……ふざけんなツ！)

思考をクリアに。視界も鮮明に。

相手はどうしようもないくらい文明を駆使する未来的宇宙人でありながら、空想を現実に変えるチート野郎でもある。対してタツルは なりたての不老不死。

「一つ聞くが、お前は不老不死を殺せるくらいの想像が出来るのか？」

「……出来る。ゆまは、なんだって、想像できる」

タツルの挑発に乗るようにして、>紫電龍王グラヒレイは左手を巨大な大剣へと変えた。

「……これは、アンデッドスレイヤー。不死を殺す、ゆまが考えた、武器」

「へ、へえ……」

ごくりと生唾を飲む。あれに斬られたら自分は死ぬ 何故だが、そんな確信があった。

とはいえ、スピカは今や、>紫電龍王グラヒレイの右腕のムチ状の武器に巻かれて喋ることも出来ない。行動できるのは この場を覆せるのは、？自分しかない？。

ならばやるしかない。

？恩は返してこそ忠義？ 自分はまだ何も恩返しが出来ていないのだから。

「ふう」

やると決めたら、心は至って静かになった。

タツルは集中する。同時に力を欲した。

スピカを守りきれぬくらいに 力が、欲しい。

(頼む母さん、俺に力をツ！)

「……………」

ドクン。

瞬間、何かが脈を打った。どこかが、熱くなった。かつて感じたことのないエネルギーが、タツルの？一点？に集中していくのを感じた。

「……………」モッコリンにも、寝ててもらう。おやすみ」

刹那、>紫電龍王クラヒレイくが爆ぜるようにして突進、袈裟斬りの要領で斜めより大剣を打ち降ろした。おやすみなんていうレベルではない、本気の一撃。圧倒的な威力で、その剣閃は風を裂いてタツルへと肉薄した。

しかし。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

雄たけびとともに、タツルはエメラルドグリーンの輝きに包まれる。>紫電龍王クラヒレイくの大剣がタツルの肩を掠めるよりも先に、

「……………」ツ！？」

タツルの股間より爆発的に伸びた何かが、>紫電龍王クラヒレイくの腹部の装甲を貫き 粉碎して弾き飛ばした。

「……………」えっ」

タツルは啞然とする。

何故ならば、そう。伸びていたからだ。

なんというか、その、タツルの ツチノコが。

「お、俺のツチノコさんがああ！？」

一気に取り乱す。タツルが自らのズボン突き破ったそれを見ると、そもそも普通ではなかった。雪のように真っ白な装甲に覆われ、さらには淡く発光しているのである。それはさながら、ライトセーバーのような……………」。

「ツ、ツチノコ……………」？ ゆ、ゆま……………」巨大化したツチノコさんに、貫かれた……………」？」

一方、わなわなと震えるのはユマである。彼女はタツルより、勃起という単語を学んでいた。今のタツルは、どう見たって完全に勃

起状態であり、ユマはそれによって装甲を貫かれたのだ。

彼女の脳裏によぎるのは、妊娠の二文字。

「ぷはっ……って、タツル!? あ、あんたソレ……」  
完全装鋼く  
!??」

>紫電龍王くが弾き飛ばされたことによって、スピカが息を吹き返す。彼女は変貌したタツルにぎよつとし、驚きを口にした。

「た、助けてスピカ! お、俺、これ、どうしたらいいの!」

「あんたなんでそれ……なんでそんなことに!??」

「知らないよ! どうしたらいいの!??」

慌てふためくタツル。スピカは額に手を当てながら、ふうと息を吐いて、答えた。

「え、えつと……」  
完全装鋼くはね、所持者のイメージを汲み取って力に変える鎧なのよ! そうね、なんか念じてみなさい! 例えば弾丸を放つイメージよ!」

巨大化したツチノコを持って余すタツルに、スピカが強気に助言した。

なるほど、と納得したタツルは股間に意識を集中。弾丸を発射するイメージを加える。

すると刹那、タツルのツチノコの先端が砲身状に変形。ダダダンツ、と白く発光する弾丸が連続して勝手に放たれた。

「え、ちよ!??」

驚くタツルを置き去りにして、弾丸は軌道に乗り、弾き飛ばされて座り込む>紫電龍王くの砕けた装甲に 追い打ちをかけるようにして、爆音とともに命中した。

「ふえ!??」

腹部に思いきり着弾した>紫電龍王くが、生身の姿へ強制的に戻される。それはすなわち、ユマがダメージを受けて一気に戦意を喪失し、自らの敗北を認めたということだった。

「う、そ……ゆま……ツチノコから、白いの、発射されて……  
装甲の、内側に……」

校庭で仰向けになりながら、ユマは無心で呟いた。巨大化したツチノコに貫かれ、白い弾丸を撃たれたユマ。彼女にとって、その事実が意味することは一つである。

「ゆま……もしかして……妊娠、させられた……？」  
ユマの表情がみるみるうちに朱に染まる。

しかしタツルには、彼女が何に葛藤しているのかさっぱりなのだった。

「勝った……のか？」

ほそりと勝利を確認するように、タツルは＜完全装鋼アムルディア＞を解除したスピカに尋ねた。「そのようね」と不思議そうな目でスピカは答えた。

「……ところで、スピカ。これ、どうやったら元に戻るんだ？」

だらりと伸びきった装甲ちんちんを指差しながら、タツルは笑顔でスピカに尋ねる。

するとスピカは、首をひねりながらこう言った。

「……さあ。わかんない。あたしの場合は念じたら戻るけどね」  
「なるほど」

タツルは股間に意識を集中する。スピカの助言に従い、戻れと念じる。

しかしどうにもならない。

「あの、ダメみたいなんですけど……」

「じゃあ、無理よ。ずっとそのままね」

「……………えっ。マジで？」

「マジよ」

タツルは目の前が真っ暗になった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8928z/>

---

キミと僕が全裸になる確率-18%（ライトな口ボラブコメ）

2011年12月28日02時03分発行